

田中貢太郎



 火炎語集



# 怪談集



藍岩堂



怪譚小説の話

葬式の行列

おいてけ堀

貉

狸と俳人

狸と同棲する人妻

義猫の塚

沼田の蚊帳

首のない騎馬武者

女仙

風呂供養の話

海神に祈る

火傷した神様

雪女

幽霊の衣裳

阿芳の怨霊

法華僧の怪異

轆轤首

円朝の牡丹燈籠

南北の東海道四谷怪談

# 怪譚小説の話

私は物を書く時、面白い構想が浮ばないとか、筋が纏まらないとかというような場あいには、六朝小説を出して読む。それは晋唐小説六十種で、当時の短篇を六十種集めた叢書であるが、それには歴史的な逸話があり、怪譚があり、奇譚があつて、皆それぞれ面白い。泉鏡花子の『高野聖』は、その中の幻異志にある『板橋三娘子』から出発したものである。板橋に三娘女という宿屋をしている老婆があつて、それが旅人に怪しい蕎麦の餅を啖わして、旅人を驢にして金をもうけていたところで、趙季和という男がそれを知って反対にその餅を老婆に啖わして老婆を驢にしたという話で、高野聖では幻術で旅人を馬にしたり猿にしたりする美しい女になっており、大体の構想に痕跡の拭うことのできないものはあるが、その他は間然する処のない独立した創作であり、また有数の傑作でもあつて、上田秋成が『西湖佳話』の中の『雷峯怪蹟』をそっくり翻案して蛇性の姪にしたのとは甚だしい相違である。

またその叢書の中の『幽怪録』には、岩見重太郎の緋狒退治というような人身御供の原話になっているものがある。それは唐の郭元振が、夜、旅をしていると、燈火の華やかな家があるので、泊めてもらおうと思つて往くと、十七八の娘が一人泣きくずれている。聞いてみると、將軍と呼ばれている魔神の犠牲にせられようとしていた。そこで郭は、娘を慰めて待つていると、果して轎に乗つて数多の供を伴れた男が来た。郭は珍しい肴を献上するといつて、鹿の腊を出すふりをして、その手を斬り落し、翌日血の痕をつけて往くと、大きな猪であつたから殺して啖つた。この幽怪録の話は、明の瞿佑の『剪燈新話』の中の申陽洞の記の粉本になっている。

またその叢書の『続幽怪録』の中にある定婚店の話は、赤繩の縁の伝説である。韋固という者が結婚の事で人に逢う約束があつて、朝早く竜興寺という寺へ往つたところで、一人の老人が階段の上で袋にもたれて物を読んでいた。韋固がそれは何かと云つて聞くと、男女の結婚の事を書いたもので、袋の中には赤い繩があるが、その繩で男と女の魂を繋ぐと、どうしても夫婦になるといつた。そこで自分の結婚の事を聞くと、それは調わない、君の細君になる女は今年三つで、十七にならんと結婚はできないが、今それは乞食のような野菜売の婆さんに抱かれて、毎日市場へ来ているといつた。韋固は忌ましいので、下男にいつけて殺しにやつた。下男は子供の額に斬りつけて逃げてきたが、後十四年して細君を迎えたところで、その細君は何時も花鈕を額へ垂らしていた。理を聞いてみると、三つの時に兇漢に刺されて傷があるからだといつた。

要するに六朝小説は支那文学の源泉で、それが小説になり、戯曲になり、詩になり、その流れは『搜神記』『剪燈新話』『西湖佳話』『聊齋志異』というような怪譚小説になつた。秋成の蛇性の姪は『西湖佳話』の翻案であるといふ事は今もいつたが、円朝の怪談で有名な彼の『

ぼたんどうろう

『牡丹燈籠』は『剪燈新話』の中の『牡丹燈記』から出たもので、この牡丹燈記の話は、他にもいろいろな話になっている。小泉八雲こいずみやくもの怪談の中にある耳なし法師の話も、やはり『牡丹燈記』の変形である。

小泉八雲の怪譚といえば、私の好きなものはむじな 貉の怪談である。商人が紀のき 国坂くにざか を通っていると娘が泣いている。傍へ往って慰めてやろうとすると娘が顔をあげたが、それは目も鼻もないのっぺら坊であった。商人はふる 顫えあがって逃げていと夜鷹蕎麦よたかそば がいた。ほっとして傍へ往くと、蕎麦屋のおやじ 爺仁わけ が理を聞くので、のっぺら坊の妖怪に逢った事を話すと、爺仁は顔をな つるりと撫でて、こんな顔であったかといった。それも目も鼻もないのっぺら坊であった。

こののっぺら坊の話は、ほんじょ 本所の七不思議の置いてけ堀と一つのものである。私の郷里にも同系統の話がある。場所は一方に山があり一方に畑や松原があつて人家も何もないところで、そして、東から来ると山の取付に三味線松というてんぐ 天狗が来て三味線を弾くという伝説の松があつて、私なども少年の時はこわ ひどく怖かった。

あるひ 某日の夕方、村の女の一人がその三味線松の下を通っていると、すぐ前に女が歩いている。村の女はつ 伴れが見つかったので喜んで傍へ行き、土地のことば 詞で、  
「どうぞ、いっしょ 一所に往てつかわされませ、みょうな物がおるといいますきに」  
というと、前の女は、  
「ありや、わたしかよ」  
といて振りかえつたが、それは目も鼻もないのっぺら坊であった。

# 葬式の行列

つるおか おおぼうへえ なかま  
鶴岡の城下に大場宇兵衛という武士があった。其の大場は同儕の寄合があったので、それに往  
よなかごろ  
って夜半比に帰って来た。北国でなくても淋しい屋敷町。其の淋しい屋敷町を通っていると  
と  
、前方から葬式の行列が来た。夕方なら唯もかく深夜の葬式はあまり例のない事であった。大場  
は行列の先頭が自分の前へ来ると聞いてみた。

どなた  
「何方のお葬式でござる」

あいて ちゅうちよ  
相手は躊躇せず云った。

「これは大場宇兵衛殿の葬式でござる」

「なに、おおぼうへえ」

「そうでござる」

行列は通りすぎた。宇兵衛は気が転倒した。そして、家へ帰ってみると、玄関前に焚火をした  
たきび  
ばかりの痕があった。それは葬式の送火であった。

大場は其の晩からぶらぶら病になって、間もなく送火を焚かれる人となった。

おいてけ堀

ほんじよ たけぐら ひふくしょう  
本所のお竹蔵から東四つ目通、今の被服廠跡の納骨堂のあるあたりに大きな池があって、  
それが本所の七不思議の一つの「おいてけ堀」であった。其の池には鮒ふなや鯰なますがたくさんいた  
ので、釣りに往く者があるが、一日釣ってさて帰ろうとすると、何処どこからか、おいてけ、おいて  
けと云う声があるので、気の弱い者は、釣っている魚を魚籃びくから出して逃げて来るが、気の強い  
者は、風か何かのぐあいふるでそんな音がするだろう位に思って、平気で帰ろうとすると、三つ目小  
僧ろくろくびが出たり一つ目小僧からかさが出たり、時とすると轆轤首ばけ、時とすると一本足の唐傘のお化が出て路  
を塞ぐふさので、気の強い者も、それには顫えあがって、魚は元より魚籃も釣竿もほうり出して逃げ  
て来ると云われていた。

きんた つりずき わかいしゅ い  
金太と云う釣好の壮佼あがあった。金太はおいてけ堀に鮒が多いと聞いたので釣りに往った。  
りょうごくばし  
両国橋を渡ったところで、知りあいの老人に逢った。

「おや、金公か、釣りに往くのか、何処だ」

「お竹蔵の池さ、今年あすこは鮒が多いと云うじゃねえか」

「彼処えてものは、鮒でも、鯰でも、たんといるだろうが、いけねえぜ、彼処には、怪物ばけがいるぜ」

金太もおいてけ堀の怪あやしい話は聞いていた。

「いたら、ついでに、それも釣ってくるさ。今時、唐傘のお化でも釣りゃ、良い金になるぜ」

「金になるよりゃ、頭からしゃぶられたら、どうするのだ。往くなら、他へ行きなよ、あんな  
えんぎ ところ  
縁儀えんぎでもねえ 処ところへ往くものじゃねえよ」

「なに、大丈夫ってことよ、おいらにゃ、神田明神かんだみょうじんがついてるのだ」

「それじゃ、まあ、往ってきな。其のかわり、暗くなるまでいちゃいけねえぜ」

「魚が釣れるなら、今晚は月があるよ」

「ほんとだよ、年としよりの云うことはきくものだぜ」

「ああ、それじゃ、気をつけて往ってくる」

金太は笑い笑い老人に別れて池へ往った。池の周囲まわりには出たばかりの蘆あしの葉ひるが午の微風にそよ  
いでいた。金太は最初のうちこそお妖怪のことを頭ばけにおいていたが、鮒が後から後からと釣れる  
ので、もう他の事は忘れてしまっつて一所懸命になって釣った。そして、近くの寺から響いて来る  
鐘つに気が注ついて顔をあげた。十日比ごろの月魄つきしろが池の西側の蘆の葉の上にあった。

金太はそこで三本やっていた釣竿をあげて、糸を巻つけ、それから水の中へ浸けてあった魚籃  
をあげた。魚籃には一貫匁つあまりの魚がいた。

「重いや」

金太は一方の手に釣竿を持ち、一方の手に魚籃を持った。と、何処からか人声のようなものが  
聞えて来た。

「おい、てけ、おい、てけ」

金太はやろうとした足をとめた。

「おい、てけ、おい、てけ」

金太は忽ち、<sup>あざけり</sup> 嘲 の色を浮べた。

「なに云ってやがるんだ、ふざけやがるな、<sup>くそ</sup> 糞 <sup>くら</sup> でも啖えだ」

金太はさっさとあるいた。と、また、おい、てけの聲が聞えて来た。

「まだ云ってやがる、なに云ってやがるのだ、こんな<sup>うま</sup> 旨い鮒をおいてってたまるものけい、ふざけやがるな。<sup>たぬき</sup> 狸 <sup>きつね</sup> か、<sup>くやし</sup> 狐 <sup>くやし</sup> か、口惜けりゃ、一本足の唐傘にでもなって出て来やがれ」

金太は気もちがわるいので足はとめなかった。と、眼の前へひょいと出て来た者があった。それは人の姿であるから一本足の唐傘ではなかった。

「何だ」

鈍い月の光に眼も鼻もないのっぺらの蒼白い顔を見せた。

「わたしだよ、金太さん」

金太はぎょっとしたが、まだ何処かに気のたしかなところがあった。金太は魚籃と釣竿を落とさないようにしっかり握って走った。後からまた聞えてくるおいてけの聲。

「なに云やがるのだ」

金太はどんどん走って池の<sup>へり</sup> 縁を離れた。来る時には気が注かなかったが、其処に一軒の茶店があった。金太はそれを見るとほっとした。金太はつかつかと入って往った。

「おい、茶を一ぱいくんねえ」

<sup>あんどん</sup> 行燈 <sup>うすぐら</sup> のような <sup>どま</sup> 微暗い燈のある土室の隅から老人がひょいと顔を見せた。

「さあ、さあ、おかけなさいましょ」

金太は入口へ釣竿を立てかけて、土室の横へ往って腰をかけ、手にした魚籃を<sup>あしもと</sup> 脚下へ置いた。老人は金太をじろりと見た。

「釣りのおかえりでございますか」

「そうだよ、其所の池へ釣に往ったが、爺さん、へんな物を見たぜ」

「へんな物と申しますと」

「お妖怪だよ、眼も鼻もない、のっぺらぼうだよ」

「へえエ、眼も鼻もないのっぺらぼう。それじゃ、こんなので」

老人がそう云って片手でつるりと顔を撫でた。と、其の顔は眼も鼻もないのっぺらぼうになっていた。金太は悲鳴をあげて逃げた。魚籃も釣竿も其のままにして。

貉

幕末の話である。

あるあきんど よふけ あかさか き くに きしゅうてい ついじ ほり  
某商人が深更に赤坂の紀の国坂を通りかかった。左は紀州邸の築地塀、右は濠。そして、  
ひこね しんしん こわ  
濠の向うは彦根藩邸の森々たる木立で、深更と言い自分の影法師が怖くなるくらいな物淋しさ  
ほりばた  
であった。ふと濠傍の柳の木の下にうずくまっている人影に気づいた。

しょうぜん たもと  
どうやら若い女のように、悄然と袂に顔をうずめて泣いているのであった。商人はてっきり  
そば い  
身投げ女だと思った。驚かさないようにして女の傍へ寄って往った。

「どうかしたのかい、姉さん。狭い量見を起しちゃいけないよ」

女は顔もあげないでしくしくと泣きつづけた。商人は寄り添って腰をかがめた。

「ね、どうしたんだい。姉さん思案にあまることがあるなら、いくらでも力になってやるよ、わけを言って見な」

女はますます袂へ顔をうずめて泣き入るばかりであった。商人はじれったくなくて女の肩へ手をかけた。

「どうしたのだ、姉さん、人が親切に言ってるのだ、わけを言ったらいいじゃないか」

女はひょいと袂から顔をあげた。それは目も鼻も何もないのっぺら坊であった。

「わ」

よつや よたかそば  
商人は一声叫ぶなり坂を四谷の方へ逃げあがった。あがったところに夜鷹蕎麦の灯があった。  
ふいご いき  
商人は鞆のような呼吸と同時にその屋台へ飛びこんだ。

「大変だ、大変だ」

「どうなすったかね」

おやじ  
もやもやと立つ湯気の向うにいる親爺はつまらなさそうに言った。

ぶ つ  
「どうもこうもありやしねえ、そこで大変な代物に衝突かったんだい」

おいはぎ  
「追剥にでもお会いなすったかね、当世珍らしくもねえ話だ」

ばけもの  
「馬鹿にするな、追剥ぐらいで江戸っ児が騒ぐかい。妖怪に会ったんだい、大変な顔をしてやがったのだ」

「へ、大変な顔、どんな大変な顔でござんした」

「それがおめえ、恐ろしいの何のって、とても一口にや言えやしない」

「こんな顔じゃなかったかね」

ひたい  
親爺はぴしゃりと額を一つ打つなり湯気の間から顔を出した。目も鼻も何もないのっぺら坊だった。

たくさんす いたずら  
商人は気を失った。その頃紀の国坂一帯には貉が数多棲んでいて、よく悪戯をしたと言われている。

# 狸と俳人

あんえい いせたいびょう ないぐうりょう げくうりょう  
安永年間のことであった。伊勢大廟の 内宮領 から 外宮領 に至る裏道に、柿で名のある  
れんだいじ さわだしょうぞう  
蓮台寺と云う村があるが、其の村に 澤田庄造 という人が住んでいた。

ながよ ろくめい  
庄造は又の名を永世と云い、号を 鹿鳴 と云って和歌をよくし俳句をよくした。殊に俳句の方で  
ころ  
は其の比なかなか有名で、其の道の人びとの間では、一風変わったところのある俳人として知られて  
いた。

はんざつ めと  
庄造は 煩雑 なことが嫌いなので、妻も 嫁らず 時どき訪れて来る俳友の他には、これと云って親  
ろうきよ  
しく交わる人もなく、一人一室に 籠居 して句作をするのを何よりの楽しみにしていた。

あるとし ゆうべ すす ふけ  
某年の晩秋の 夕 のことであった。いつものように 渋茶 を 啜りながら句作に 耽っていた庄  
つ  
造が、心と見ると窓の障子へ怪しい物の影が映っていた。庄造は不審に思っ 衝 と窓の障子に手  
たれ にわさき  
をかけたが、何人か人だったら気はずかしい思いをするだろうと思ったので、其のまま 庭前 へ廻  
びき うづく  
って窓の外を見た。窓の外には一疋の古狸が 蹲 まっていたが、狸は庄造の姿を見ても別に逃げ  
かえ ふ きょう  
ようもしないのみか、劫ってうれしそうに尻尾を掉るのであった。庄造は 興 あることに思  
うち うま い  
って、家の中から食物を持って来て投げてやった。と、狸は 旨 そうにそれを食ってから 往って  
しまった。

あくるひ  
其の翌日の夕方も庄造が書見をしていると、又窓の外へ狸が来て蹲まった。庄造は又食物を持  
って出て、狸の頭を撫でたりしたが、狸はちっとも恐れる風がなかった。

其の狸は其の翌晩もやって来た。庄造は待ちかねていて座敷へ呼び入れた。狸は初めの間は躊躇  
している様子であったが、やがて尻尾を掉りながらあがって来た。そして、庄造が書見をして  
さび  
いる傍に坐って一人で遊んでいたが、暫らくすると 淋 しそうに帰って 往った。

それから狸は毎晩のようにやって来た。庄造は淋しい一人生活の自分に良い友達が出来たよう  
ぐらし  
な気がしてうれしかった。狸は庄造に 馴れて 庄造が 帰れ というまで何時までも遊んで 往くよう  
なになった。

あるよ  
某夜狸がいつものように庄造の傍で遊んでいるうちに戸外は大雪になった。庄造は積った雪を  
見て狸を帰すのが可哀そうになった。で、狸の頭を撫でながら、

「おい、ため公、今夜は雪だから泊って 往け」

と云うと狸は尻尾を掉って喜んだ。其の夜狸は庄造の床の中へ入って寝たが、それから狸は庄  
造の許で泊って 往くようになった。

庄造が狸を可愛がっていることは、やがて村中の評判になった。村人は時どき夜の明け方な  
どに、庄造の家から出て 往く狸の姿を見ることがあったが、互にいましめあって危害を加えな  
かった。そして、村の子供達にも、

いたずら  
「先生様の狸に 悪戯 しちゃいかんぞ」

と云い云いした。ところで、其の庄造が病気になった。初めはちょっとした風邪であったが、  
かぜ  
それがこうじて重態に陥った。村人達はかわりがわり庄造の病気を見舞ったが、其の都度庄造の

まくらもと

枕許まくらもとに坐っている狸の殊勝な姿を見た。庄造は自分の病気が重って永くないことを悟ったので、某日其の狸に云った。

「お前とも永らくの間、仲よくして来たが、いよいよ別れなくてはならぬ日が来た。私がいなくなったら、もうあまり人に姿を見せてはならんぞ。それにどんなことがあっても、田畑などは荒さぬようにしろよ。さあ、もういいから帰れ」

庄造の言葉が終ると狸はしょうぜん 悄然として出て往った。其の夜、庄造は親切な村人達みに看とられて息を引きとった。それはあんえい 安永七年六月二十五日のことであつた。

それから数日の後のことであつた。一日の仕事を終った村人の一人が家路に急ぎながら、庄造の墓の傍近くに来かかった時、其の墓の前に、蹲っている女の姿が眼つに注いた。其の女は美しいきもの 衣服を着て手に一束の草花を持っていた。そして、よく見ると女は泣いているらしく、肩かすかのあたりが微に震えていた。それは此の附近ではついで見かけたことのない女たれであつた。村人は何人だろうと思つて不審しながら其の傍へ往った。

「もし」

村人がこう云つて声をかけた途端、其の女の姿は忽然と消えてしまった。そして、其の傍には女が手にしていた草花が落ちていた。村人達はそれを聞いて、それはきっと例の狸だったろうと云つて、其の行為を殊勝がったが、其の心が村人達をして狸には決して危害を加えまいという不文律をじらいこしらえさせた。爾来其の村では今に至るまで狸はと獲らないことになっている。

狸と同棲する人妻

もがみぐんとよだむら くつざわにぞう 山形県最上郡豊田村に沓澤仁蔵と云う行商人があった。仁蔵は<sup>わか</sup>壮いに似あわず、家業に熱心で、毎日のように村から村へと行商に出かけて往った。其の仁蔵には<sup>なお</sup>直と云う<sup>ひょうばん</sup>近隣で評番の美しい女房があった。

それは昭和七年の二月のことであった。仁蔵は<sup>いつも</sup>平生のように家を出て<sup>い</sup>往ったが、どうしたものか其の日も其の翌日も、また其の翌日も帰って来もしなければ、手紙も送って来なかった。女房の直は心配して心あたりを探して歩いたが、<sup>どこ</sup>何処へ往ったのか判らなかつた。

其のうちに四月になって、山々の雪が解けかけたところで、仁蔵がひょっこりと帰って来た。直は仁蔵の顔を見るなり、

「まあ、おまえさん」

と云って、仁蔵に取りすがって泣いた。仁蔵は良い商売があったから、さきからさきへ往っていたと云って、もうけたと云う金を出してみせた。直はそれで安心した。仁蔵はそれからまた行商に往ったが夕方にはきつと帰った。

其の日も平生のように帰って来たので、すぐ夕飯にして二人で楽しそうに食事をしていたところで、<sup>け</sup>ふいに表の障子を蹴やぶるようにして<sup>こんぼう</sup>飛びこんで来た者があつた。それは一方の手に棍棒を持っていたが、<sup>なぐ</sup>飛びこんで来るやいなや仁蔵を撲りつけた。

「な、なにをする」

直は<sup>むほうもの</sup>驚いて無法漢に立ち向つた。其の無法漢は仁蔵に<sup>いきうつし</sup>生写の男であつた。

「あ」

直は<sup>みは</sup>眼を睜つた。直は倒れている<sup>おっと</sup>所夫の仁蔵を見た。其<sup>そこ</sup>処には所夫のかわりに一匹の大きな狸が血まみれになって倒れていた。

直が四月以来同棲していたのは狸であつた。

一方行商に出ていた仁蔵は、<sup>あっちこっち</sup>夢遊病者のようになって<sup>つ</sup>彼方此方歩いていて、やっと気が注いで帰って来たところで、女房の直が大きな古狸と<sup>むつ</sup>睦まじそうに飯を食っているのので、棍棒を<sup>と</sup>執つて飛びこむなり狸を撲り殺した。

直は其の夜から病気になるて寝ていたが、間もなく死んでしまった。

# 義猫の塚

えんしゅう おまえざき せいりんいん  
遠州の御前崎に西林院と云う寺があった。住職はいたって慈悲深い男であったが、ある風波の激しい日、難船でもありはしないかと思って外へ出てみた。すると、すぐ眼の下になった  
どう  
怒濤の中に、船の破片らしい一枚の板に一匹の子猫がしがみついているのが見える。そこで住職は山をかけおりて漁師の家へ往って、

「可哀そうだから、たすけてやってくれ」

と云ったが、風波が激しいので何人一人舟を出そうとする者がなかった。すると住職は、  
「それでは舟をかしてくれ」

と云って、自ら舟を出そうとするので、漁師たちも住職の真剣な態度に動かされて、とうとう舟を出して其の猫を救った。そうして猫は西林院に飼われるようになったが、住職の云うことをよく聞きわけるので、住職も非常に可愛がった。

それから十年してのことであった。それは春のことであったが、其処の寺男が縁側で仮睡をしてしていると、小さなみやあみやあと云うような変な話声が聞えて来た。

「いい陽気じゃないか、一つ伊勢詣にでも往こうじゃないか」  
「往きたいには往きたいが、近いうちに、うちの和尚さんの身に、変わったことがありそうだから」

「そうかね、おまえさんは、和尚さんに助けられた恩義があるからね」

寺男ははっとして眼を開けたが、縁側には彼の飼猫と近くの寺の猫がいるだけで他には何もいなかった。其のうちに夜になって寝たところで、天井裏で喧嘩でもするような大きな物音がした。寺男はびっくりして眼を覚ましてみると、住職がもう起きて行燈に燈を点けていた。

「何でしょう」

「さあ」

二人は行燈の燈で彼方此方を見まわったが、別に怪しいこともないので、其の夜は其のままにして寝たが、朝になって住職が本堂へ往ったところで、其処の天井裏から生なましい血が滴っていた。住職は驚いて檀家の壮い者に来てもらっていっしょに天井裏へあがった。天井裏には彼の飼猫と近くの寺の猫が血に染って死んでいたが、その傍に三尺近い大鼠が死んでいたが、それは僧侶の被る法衣を被っていた。

「おう」

其の時住職の頭を掠めたものがあつた。それは其の数日前、何処からともなく来て滞在していた旅僧のことであつた。住職は念のために旅僧の室に往った。其処には敷きっぱなしにした寝床があるだけで、旅僧の姿は見えなかつた。そこで住職は心でうなづくことがあつた。

今西林院にある義猫の塚は、彼の飼猫と近くの寺の猫を合せ葬つたものであつた。

# 沼田の蚊帳

あんせい 年間の事であった。 両国 矢の倉に 栄蔵 と云う旅商人 があった。其の男は近江から蚊帳を為入れて、それを 上州 から野州 方面に売っていたが、 某時 沼田へ往ったところで、領主の土岐家へ出入してる者があって、其の者から土岐家から出たと言う蚊帳を買って帰り、それを 橘町 の佐野又と云う質屋へ持って往った。それは十畳吊の萌黄地の近江麻で、裾は浅黄縮緬、四隅の大房から吊手の輪乳に至るまで、凝ったものであったから 主翁 は気にいった。そこで主翁は十五両で買ったが、それは一両三步二朱で買った物であるから 栄蔵 は大喜びであった。ところで翌朝、 栄蔵 の家へ佐野又から使が来た。 栄蔵 は何事だろうと思って出かけて往った。

「旦那、お使いをいただきまして」

「栄蔵か、此の蚊帳は返すよ。 浜町 の親父が来て、吊って寝ると云って持ってったが、蚊帳の外へ、養老しぼりの浴衣を着た、二十位の女が来て中を覗いたそうさ。金は要らないから持ってってくれ」

と云って蚊帳を返された。 栄蔵 が後で探ると、土岐家の 妾 が小姓と不義をしたと云う嫌疑で、其の蚊帳の内きで斬られたとの事であった。

# 首のない騎馬武者

えちぜん ふくい きた しょう 越前の福井は元北の庄と云っていたが、ゆうきひでやす 越前宰相結城秀康が封ぜられて福井と改めたもので、其の城址は市の中央になって、其処にはまつだいら 松平侯爵邸、県庁、裁判所、県会議事堂などが建っている。そして、しばたかついえ あと 柴田勝家の居城の址は、市の東南の方角に在って、明治四十年までは石垣なども残っていたが、四十年になって市中を流れているあすばがわ 足羽川を改修したので、大半は川の底になってしまった。

明治の初年のことであつた。月の明るい晩、それがし 某と云う者が北の庄の大手のあつたところ 処を歩いてたところで、いくら 幾何往っても同じ処へ帰って来て、どうしても他へ往くことができなかった。そこでふと気をつけてみると、じぶん まわり 己の周囲には城のますがた 枡形らしい物の影が映っていた。大手の址はあつても建物も何もないのに枡形の映るは不思議であつた。某はふる 顫いあがって逃げようとしたが、どうしても枡形の外へ出られないので朝までそこ 其処に立ちすくんでいた。

幕末のころ 比、ころ ぼう 某と云う医師があつて夜遅く病家へ往って帰っていた。それは月の明るい晩であつた。其の大手を通っていると、かつかつ おびただ ひづめ 憂々と云う夥しい馬の蹄の音が聞えて来た。続いてよろい 鎧であろう金属の触れあうような音も聞えて来た。おやと思つて見ると、騎馬武者の一隊が前から来ているところであつた。

某は不思議に思つたが路の真中に立っていられないので、路ぶちへ寄つて見ていると、騎馬武者の一隊は、其の前をしゆくしゆく 粛々と通りすぎようとした。医師はどうした軍勢だろうと思つて見ると、其の武者にはどれもこれも首がなかつた。はつと思つて眼を下へやると、それには何の影もなかつた。

医師は驚いてうち 家へ帰るなり、家の者を起してその話をしたが、しているうちに血を吐いて死んだ。それは柴田勝家の亡霊で、同地方では、それを見た者は死ぬと云われているものであつた。

# 女仙

いちがや じしやういん そうぼか さいおうじゆうとく さいおうぼう  
市ヶ谷の自証院の惣墓の中に、西応従徳と云う法名を彫った墓がある。それは西応房と  
どうしんぼうず  
云う道心坊主の墓で、墓の主の西応房は、素養などはすこしもなかったが、殊勝な念仏行者で、  
生涯人の悪を云わず、他人の罪を被せられても弁解せず、それで咎められる事でもあるとあやまり  
入り、それが後になって明白になっても、別に喜びもしないで、そうであったかなあと云って  
すましていた。往生したのは天保十一年×月十三日で、其の前日の十二日には弥陀如来の来迎を  
拝したと云われている。

びしゅうなかにまごおりいち みや ひだ  
其の西応房は尾州中島郡一の宮の生れであったが、猟が非常に好きで、そのために飛騨の  
国へ往って猟師を渡世にしていた。

あるとき きそ おんたけ いのしし  
某時木曾の御岳の麓へ往って、山の中で一夜を明し、朝の帰り猪を打つつもりで、待ち受  
けていると、前方の篠竹がざわざわ揺れだした。西応房の猟師は、さては猪か熊か、とにかく獲  
物ござんなれと、猟銃を持ちなおして獲物の出て来るのを待っていた。と出て来たのは十六七の  
綺麗な少女であった。おや人間であったか、それにしてもこんな深山の夜明けに、少女などが平  
気で来られるものでない。これはどうしても変化の者に相違ない。しっかりしていないと其の餌  
食になる。機先を制して打ち殺せと、用意の錬り玉と云うのを手早く込めなおして、著弾距離  
になるのを待っていたが、少女はすこしも恐れるような気ぶりも見せず、平然として前へ来た。  
「頼みたい事があってまいったから、どうかそんな物を引っこめてもらいたい。打とうと思った  
ところで、鉄砲などの的あたのような者でもない、それに一所懸命に狙っておっては、わたしの云う  
事が判らないであろう」

くちもと  
少女の口辺には微笑が浮んでいた。西応房の猟師は猟銃を控えた。  
いいだ あるむら なにそれがし  
「わたしは飯田在の、某村の何某の娘であるが、今から十三年前、ちょうど十六の七月に、  
近くの川へ洗濯に往っておって、遁れられない因縁から、そのまま山に入って仙人になったが、  
両親はそれと知らないで、其の日を命日にして、供養してくれるのはありがたいが、仙界ではそ  
れが障碍しょうげになって、修行の邪魔になる。それに来年は、一級仙格せんかくが進んで、鈴鹿の神になる事  
になっておるが、両親は今年が十三回忌に当るから、此の七月にまた法要をしてくれようとして  
おるが、それでは到底鈴鹿の神になる事ができぬ。それで大儀ながらわたしの家へ往って、以来  
仏事供養は、無用にしてもらおうよう伝えてもらいたい」

ことば いい  
西応房の猟師は女の詞を疑わなかった。彼は唯唯として其の命に従った。すると、  
「その方は、自分一人の渡世のために、数知れぬ鳥や獣の命を奪っておるが、それでは罪業ざいごうを増  
すばかりである。渡世は猟師に限るまい、何か他の事をするがよい」

西応房の猟師は家へも帰らず、其の足で飯田在へ往って、其の両親と云う者に逢って、仙女  
の云った事を確かめると、寸分の相違がなかった。西応房の猟師は、事の不思議さに恐れをな  
すとともに、猟師の罪業の深い事も覚って、名古屋へ出て武家奉公などをしていたが、気がすま  
ないので、江戸へ出て自証院の道心坊となったのであった。

# 風呂供養の話

中国山脈といっても、<sup>はりま たじま</sup>播磨と但馬の国境になった谷あいの地に、世間から忘れられたような僅か十数戸の部落があったが、生業は云うまでもなく炭焼と獵師であった。

それは明治十五六年比ごろの秋のことであった。ある日、一人の旅僧がひょうぜん飄然とやって来て、<sup>かんえもん</sup>勘右衛門という部落でも一番奥にある獵師の家の門口こに立って、一夜の宿を乞うた。

その日、<sup>あるじ</sup>亭主の勘右衛門は留守であったが、女房と娘が出て見ると、二十六七いかの如何にも温厚いとそうな眉目清秀の青年僧で、べつに怪しいところもないので、むさくるしい処でもお厭いといなくばと云って泊めた。

やがて、帰宅した亭主も旅僧を疑わず、其の夜は、旅僧から旅の話を聞いて珍らしがった。そして、<sup>あくるひ</sup>翌日あいにくになったところで、生憎とどしゃぶりの雨になって、それがその翌日も続いたので、<sup>とうりゅう</sup>旅僧はしかたなく逗留ちよすることになったが、娘の千代は、日一日と旅僧いになじんで往った。また一方、旅僧の方でも、千代の美しい姿びぼうにひきつけられているようであった。

千代はまだ十六の少女であったが、その美貌びぼうと気だてのよさに、近在の青年たちの注視の的となっていた。

そのうちに旅僧は、べつに先を急ぐ旅でもないから、どこか山の中に良い場所があるなら、<sup>いおり</sup>庵しずかを結んで、心静しずかに修行したいといい出した。そして、毎日のように朝早くから家を出て夕方いおりになって帰って来た。時として千代がその伴をして往くことがあった。

ところで、いつの間にか勘右衛門の女房は、<sup>あまた</sup>旅僧が数多の金あまたを持っていることを知ったので、千代を利用してそれをまきあげようと思って、それを千代にいい含めたが、千代はてんで受けつけなかった。

一方、勘右衛門は旅僧の素性や、<sup>おこない</sup>所業おこないに不審を抱くようになった。と云うのは、僧でありながらろくにお経を知らないのみか、身分不相応な金を持っていることおこないであった。勘右衛門はそうした不審を抱くとともに、そんな男に、千代を慰み物おこないにせられては大変だと云う懸念で、頭の中が一ぱいになった。

その勘右衛門が某日、山をおりて村の居酒屋へ往ったところで、居酒屋へ来あわせていた知りうち合いから妙なことを聞かされた。それは、お前の家うちに逗留している旅僧は、お尋ねものであるまむほんいか。何でも政治向のことで上方では騒動くわだがあって、謀叛を企むほんてた一味くわだの中には、殺人ひとごろしまでしながら網をくぐって、西国へ逃げた者があるそうだ。もし、其の旅僧がそのうちの一人だとすると、早く警察へ突き出さなくてはならないと云うような事であった。

勘右衛門はその時、女房が旅僧から金を貰い、そのうえ、千代を嫁にしたいと申し込まれていると云うことを聞かされた。勘右衛門の苦悶は絶頂に達したが、頭を痛めるのみでどうすることもできなかった。

旅僧は潔癖で、風呂が好きであった。千代はいつも湯殿へいって背中を流したり、肩を揉んでやったりした。其の夜も旅僧は湯槽ゆぶねにつかって、気もちよさそうに手拭で肩から胸のあたりを流していた。

外には月の光が漂よっていた。と、不意に風呂場へ忍び寄った覆面おおいがあった。覆面の手には

たねがしま

種ヶ島が握られ、火縄の端が螢火のように光っていた。

千代が銃声に驚いて駆けつけた時には、旅僧は胸に弾丸<sup>たま</sup>をうち込まれて、その血で湯を赤く染めている処であった。千代はきつと云って其処へ倒れてしまった。

殺された旅僧は、政治犯人ではなく、諸方を荒した強盗であるとのことであったが、はっきりしたことは判らなかつた。

そこで、警察の方では、旅僧の死体を葬るとともに、旅僧を惨殺した犯人を捜査したが、それも手がかりがなかつた。

それがために、旅僧の処置に困っていた勘右衛門に嫌疑がかかり拘引<sup>こういん</sup>せられることになった。哀れな千代は、そんなこんなで気が狂った。

そして、彼方此方<sup>あっちこっち</sup>へ往って、何処の家の風呂でもおかまいなしに覗き込んで泣いていたが、終<sup>しま</sup>いには空の浴槽の中へ裸体で入っていたり、万一これをさまたげる者でもであると、火をつけようとするのに手がつけられなかつた。

そこで勘右衛門の家では、千代を座敷牢へ入れたが、何時の間にか脱け出して、自分の家へ火をつけて、浴槽の中へ入って焼死した。

それと前後して、旅僧を惨殺した真犯人<sup>いし</sup>が縊死したので、勘右衛門は未決から釈放<sup>しゃくほう</sup>せられた。犯人は千代に失恋した村の若者であった。

千代の怨霊<sup>おんりょう</sup>が夜な夜な風呂場に現れると云う噂がたったのは、それから間もなくであった。そのために其の部落では、各戸にあった風呂を廃して共同風呂を設け、そこで入浴することになった。

共同風呂を設けた処は、酒や雑貨<sup>あきな</sup>を商<sup>はたご</sup>うかたわら、旅籠を兼ねている家であった。そこは裏の小川から水車で水を汲みあげるのので、共同風呂の中には平生木の葉や芥虫<sup>いつも</sup>の死骸などが浮いていた。時には小魚が泳いでいることもあった。

部落の人は共同風呂を作ったばかりでなく、千代の命日には、風呂供養とも云うべき一種の行事を営んで千代の霊を慰めたが、その日は部落の人たちは、一日じゅう行水<sup>ぎょうずい</sup>もしないで、風呂

桶を浄め、そして、それに供えものをし、燈明をあげるのであった。それはちょうど、盆<sup>ぼん</sup>の

精霊迎<sup>しょうりょうむかえ</sup>のような行事であった。長年行商をして、諸国を歩いていたKが、某時<sup>あるとき</sup>私に此の話をした。私は好奇心を動かして、

「その部落には、今でも其の習慣が残っているだろうか」

と云って聞くと、Kは、

「さあ、もう三十年も昔のことだから、どうですかねえ」

と云ったが、ついすと、今でもそれが行われているかも知れない。

# 海神に祈る

普請奉行のいちきごんべえ一木権兵衛は、一人のしたやく下僚つを伴れて普請場を見まわっていた。それはむろつこう室津港のかいさく開鑿工事場であった。海岸線が欠けたかま銚かまの形をした土佐の東南端、俗にお鼻の名で呼ばれているむろとみさき室戸岬から半里の西の室戸に、古い港があって、かんぶん寛文年間、土佐の経世家として知られているのなかけんざん野中兼山が開修したが、港が小さくて漁船以外に出入することができないので、藩ではえんぼう延宝五年になって、其の東隣の室津へ新しく港を開設することになり、権兵衛を挙げて普請奉行にしたのであった。

野中兼山の開修した室戸港と云うのは、土佐日記に、「十二日、雨ふらず（略）奈良志津よりならしず室戸につきぬ」と在るところ処で、きのつらゆき紀貫之が十日あまりも舟がかりした港であるが、後にそれが室戸港の名で呼ばれ、今ではつろこう津呂港の名で呼ばれている。兼山が其の室戸港を開修した時には、権兵衛は兼山の部下として兼山に代って其の工事監督をしていた。此の権兵衛は、とさぐん めのしだ土佐郡布師田の生れで、もと兼山の小姓であったが、兼山が藩のために各地に土木事業を興して、不毛の地を開墾そすいしたり疎水を通じたりする時には、いつも其の傍にいたので、しぜんと其の技術を習得したものであった。

権兵衛は新港開設の命を請けると、まずうきつがわ浮津川の川尻から海中に向けてえんてい堰堤を築き、港の口にすなだわら当る処には、木材を立てくっさく沙俵を沈めて、防波工事を施すとともに、内部を掘鑿して、東西二十七間南北四十二間、満潮時に一丈前後の水深が得られるように計画して、いよいよ工事に着手したところで、沙の細かな海岸へ強いて開設する港のことであるから、思うように工事ははかどらなかつた。

権兵衛は東側の堰堤を伝って突端の方へ往こうとしていた。その時五十二になる権兵衛の面長ごましおなきりとした顔は、南の国の強い陽の光と潮風のために渋紙色に焦げて、胡麻塩になった髪もすすり切れてすくな寡くなり、ぶっさき打裂羽織によしつねばかま義経袴、それで大小をさしていなかったら、土地の漁師と見さかいのつかないようなようぼう容貌になっていた。

それは延宝七年の春の二時すぎであった。前は一望さえぎる物もないらんべき藍碧の海で、其の海のかなた彼方から寄せて来る波は、ど鞆どと大きな音をして堰堤に衝突とともに、雪のような飛沫をあげていた。其処は左に室戸岬、右にぎょうどうざき行当岬の丘陵が突き出て一つのきょくほ曲浦をなしていた。堰堤の内の半ば乾あがった赤濁った潮の中には、数百の人夫が散らばって、沙を掘りはえ礁を砕いていたが、其のじゃりじゃりと云う沙を掘る音と、どっかんどかんと云う石を砕く音は、波の音とともに神経を搔きませた。また掘りあげた沙や砕いた礁のかけら破片は陸へ運んでいたが、それが堰堤の上ありにあり蟻が物を運ぶように群れ続いていた。

権兵衛はもちまえ所有の烈しい気象を眉にあらわしていた。はかどらなかつた難工事もやちよ稍緒に就いて、前年の暮一ぱいに港内の掘りさげが終ったので、最後の工事になっている岩礁を砕きにかかっ

たところで、思いの外に岩質が硬くて思うように砕けなかった。それに当時の工事であるから、岩を砕くにも大小の鉄鎚かなづちで一いち打ち砕くより他に方法がないので、それも岩礁砕破の工事の思うようにならない原因の一つでもあった。

堰堤の外側には 鷗かもめの群が白い羽を夕陽に染めて飛んでいた。陸の畑には 豌豆えんどうの花が咲き麦には穂が出ているが、海の風は寒かった。権兵衛は沙や礁の破片かけらを運ぶ物〔#「運ぶ物」はママ〕を避け避けして往った。沙を運ぶ者ざるは、箆おうこに容れて 枡あじかで担い、礁の破片を運ぶ者あじかは、大きな 箕あじかに容れて二人で差し担ゆって往くのであった。

「よいしょう、よいしょう」

「おもいぞ、おもいぞ」

「いそぐな、いそぐな」

「急いでもわれんぞ、急ぐな急ぐな」

お  
「居るぞう、居るぞう」

こわ  
「怕いぞ、怕いぞ」

権兵衛の伴したやくれている 下僚たけちそうのじょうは 武市総之丞ひとむれと云う男であった。総之丞は箕の一群をやりすごしておいて、意いみありそうに権兵衛を見た。

「お聞きになりましたか」

「何じゃ」

「今、人足が云った事でございますが」

「何と云った」

「居るとか怖いとか、口ぐちに云っておりましたが」

「あれか、あれは何じゃ」

あ かまばえ  
「あれは、彼の釜礁あまばえの事でございます」

釜礁は港の口に当る処に横たわった大きな礁で、それを砕きさえすれば工事も落著するのであった。

「釜礁がどうしたのか」

「此の二三日、彼の釜礁は、竜王わが大事にしておるから、とても破れない、また破っておいても、翌日になると、元のおりになっておるとか、いろいろの事を云っております」

「そうか、そんな事を云っておるか」

あざわらい  
これも陽の光と潮風に焦げて渋紙色になった総之丞の顔には 嘲笑あざわらいが浮んだ。

「しかし、今の世の中に、神じゃの、仏じゃの、そんな事が在ってたまりますものか、阿呆らしい」

権兵衛は足を停めた。

「待て待て、崎さきの浜はまの鍛冶屋かじやの 婆ばんば じゃの、海鬼ふなゆうれい じゃの、七人御崎みさき じゃの、それから皆がよく云う、弘法大師こうぼうだいしの石芋いしいも じゃの云う物は、皆 仮作つくりごと じゃが、真箇ほんどの神様は在るぞ」

総之丞は眼を円くした。

「在りますか」

「在るとも」

総之丞はもう何も云わなかった。総之丞は権兵衛の精神家らしい気もちを知っていた。権兵衛は歩きだした。総之丞も黙って<sup>つ</sup>跟いて往った。

二

六七人の人夫の一群が<sup>むこう</sup>前方から来た。礁の破片を<sup>はえ</sup>運んで<sup>かけら</sup>いる人夫であるから、邪魔になってはいけないと思ったので、権兵衛は体を片寄せて往こうとした。其の人夫の先頭に立った大きな男の背には一人の人夫が<sup>じゅばん</sup>負われて、<sup>きれ</sup>襦袢の衣片で<sup>てくび</sup>巻いたらしい一方の手端を其の男の左の肩から垂らしていた。そして、其の大きな男の<sup>うしろ</sup>後にも<sup>おうこ</sup>柎で<sup>あじか</sup>差し担った<sup>あじか</sup>箕が来ていたが、それにも人夫の一人が頭と一方の<sup>あしくび</sup>足端を<sup>きれ</sup>衣片でぐるぐる巻きにして<sup>あおむけ</sup>仰臥に寝かされていた。見ると其の人夫の頭を巻いた衣片には<sup>なま</sup>生な<sup>にじ</sup>ました<sup>のぞ</sup>血が浸んで、衣片の下から覗いている頬から下の色は蒼黒くなって血の気が失せていた。

「おう、これは」

権兵衛は眼を見はった。箕の横にいた<sup>よこぶとり</sup>横肥のした人夫の一人がそれを見て権兵衛の前へ出た。<sup>まつぞう</sup>それは松蔵と云う人夫の組頭の一人であった。

「どうした事じゃ」

「礁の上から転びました」

「転んだぐらいで、そんな<sup>けが</sup>負傷をしたか」

「物の<sup>はずみ</sup>機でございましょう、下に<sup>のこぎり</sup>鋸の歯のようになった<sup>のこぎり</sup>処がございまして、その上へ落ちたものでございすから」

「そうか」

一行は其の前に停まっていた。松蔵は<sup>おぶ</sup>負われている男の衣片を巻いた手に眼をやった。

「<sup>とらま</sup>虎馬は、<sup>てくび</sup>手端を折りました」それから箕に寝かされている男へ眼をやって、「<sup>ぎんろく</sup>銀六は<sup>わ</sup>頭を破りました」

銀六と云われた箕の上の人夫は<sup>かすか</sup>微に<sup>うめ</sup>呻いていた。権兵衛はそれにいたわりの眼をやった。

「それは可哀そうな事をした、早く役所へ<sup>かわい</sup>伴れて往って<sup>かわい</sup>手当をしてやれ」

「<sup>こちら</sup>虎馬の方は此方でもよろしゅうございしますが、<sup>やすだ</sup>銀六の方は、安田へ往かんと<sup>やすだ</sup>手当ができませんから、いっその事、二人を伴れて往かそうと思ひますが」

「そうか、それがええ、それでは早いがええ」

「<sup>つ</sup>そうでございます」松蔵はそこで<sup>つ</sup>気が注いで、「<sup>やすご</sup>それでは、早う<sup>やすご</sup>往け、安吾さんは役所へ寄<sup>やすご</sup>って、<sup>はやかわ</sup>早川<sup>なふだ</sup>さんから<sup>なふだ</sup>名刺を<sup>なふだ</sup>もろうて<sup>なふだ</sup>往くがええ」

安吾と云うのは<sup>うしろ</sup>後の方にいた。それは六十近い<sup>や</sup>瘦せた<sup>としより</sup>老人であった。

「ええとも、それじゃ、往こうか」

安吾の声で一行は歩きだした。権兵衛はじっとそれを見送った。松蔵は権兵衛の方へぴったり

と寄った。

「旦那」

松蔵の声は外聞はばかを 憚 ることでもあるように小さかった。

「うむ」

「妙な事を云う者がございますよ」

「どんな事じゃ」

「どんなと云いまして、妙な事でございますが、旦那はお聞きになっておりませんか」

傍には総之丞の顔があった。松蔵は総之丞へ眼をやった。

「武市の旦那は、お聞きになりませんか」

総之丞はものずき 好奇らしい眼をした。

「あれじゃないか」

「あれとは、あれでございますか」

「礁の事じゃないか」

「何人かにお聞きになりましたか」

「聞いたと云う理わけでもないが、釜礁の事じゃろう」

「そうでございますよ」それから権兵衛を見て「旦那様はお聞きになっておりますか」

権兵衛はうなず 頷 いた。

「今、総之丞から聞いたが、何か 確乎しっかり した事を見た者でもあるか」

「乃公おらが見たと云う者はありませんが、妙な事を云いますよ」

「どんな事を云っておる」

「取りとめのない事でございますが、礁へ石鑿いしのみ を打ちこむと、血が出たとか、前日まえのひ に欠いであった処が、翌日あくるひ 往くと、元の通りになっておったとか、何人かたれが夜遅く酔よっぱらって、此の上を歩いておると、話声がするから、声のする方へ往ってみると、彼の礁あの上に小坊主が五六人おって、何か理の解らん事を云っておるから、大声をすると河瀬かわうそが水の中へ入るように、ぴよんぴよんと飛びこんだとか、いろいろの事を云いまして」

「うむ」

「それに二三日、負傷けがをする者がありますから、猶更なおさら、此の礁は竜王様おしがおるとか、竜王様の惜みがかかっておるとか申しまして」

「そうか」

「それに、一昨日も昨日も負傷けがはしましたが、石の破片かけらが眼に入ったとか、生爪はを剥がしたとか、鎚で手を打ったとか、大した事もございませざったが、今日はあんな事が出来ましたから、皆みんなが怕がって仕事が手につきません。私も傍におりましたが、二人で礁の頂上げんのうへあがって玄翁で破わっておるうちに、どうした機はずみかあれと云う間に、二人は玄翁を揮り落すなり、転び落ちまふして、あんな事になりましたが、銀六の方は、どうも生命いのちがあぶのうございます」

「どうも可哀そうな事をしたが、あれには両親があるか」

ぼんば  
「婆と女房と、子供が一人ございます」

でんばた  
「田畑でもあるか」

ひたい いつも  
「猫の額 ぐらい菜園畑があるだけで、平生は漁師をしておりますから」

「そうか、それは可哀そうじゃ、<sup>あと</sup>後が立ちゆくようにしてやらんといかんが、それはまあ後の事じゃ、とにかく本人の生命を取りとめてやらんといかん」

「そうでございます」

「それから、一方の手を折った方は、あれは生命に異状はなかろう」

「あれは、安田の柔術の先生にかかりゃ、一箇月もかからんと思います」

「しかし、可哀そうじゃ、大事にしてやれ、何かの事はつごうよく取りはかろうてやる」

「どうもありがとうございます」

権兵衛は其の眼を港の口の方へやった。其処には釜の形をした大きな岩礁が小山のように<sup>そび</sup>聳えたっていたが、人夫の影はなかった。

「それでは往こうか」

権兵衛は歩きだした。松蔵と総之丞は其の後から往った。

権兵衛は釜礁かまばえの上の方へ往った。人夫たちは釜礁を離れて其の右側の大半砕いてある礁の根元を砕いていた。其処には赤泥どろんだ膝まで来る潮うしおがあった。

どっかん、どっかん、どっかん。

権兵衛は右側の礁にかかっている人夫だちの方を見ていたが、やがて其の眼を松蔵へやった。

「松蔵」

「へい」

松蔵は権兵衛に並ぶようにして前へ出た。権兵衛は屹ぎっとなった。

「松蔵、岩から血が出るの、小坊主が出るのと云うのは、迷信と云うもので、そんな事はないが、神様は在る。神様はお在りになるが、神様は決して邪よこしまな事はなさない、神様は吾われ人間に恵みをたれて、人間の為よかれとお守りくだされる。従って良え事をする者は神様からお褒めにあずかる。此の港は、此の土佐の荒海ゆききを往来する船のために、普請をしておるからには、神様がお叱りになるはずはない。此の比こ暫ごろく大暴風おおじけもせず、大波もないが、これは神様のお喜びになっておる証拠じゃ。それに此の普請は、此の釜礁を砕いてしまえば、すぐにりっぱな港になる。一日でも早くりっぱな港を作ることは、神様はお喜びにこそなれ、お叱りになることはないと思うが、其の方はどう思う」

「へい」

と云ったが、松蔵はそれに応える事ができなかった。総之丞が松蔵のために応えなくてはならぬ。

「それは一木殿のお詞ことばのとおりでございます。神様は人の為こそ思え、人を苦しめるものではございませんから、人のために作っておる港の、邪魔をするはずはありません」

権兵衛は頷いた。

「そうとも、其のとおりじゃ」松蔵を見て、「松蔵、判るか」

松蔵にもおぼろげながら其の意は判った。

「判ります」

「それでは、礁を破るに憚る事はないぞ」

「そりゃ、そうでございます」

「それが判ったなら、皆に其の事を云え」

「云いましょう、云います」

「云え、云い聞かせ」

「へい」

松蔵は何か突き当って困ったような顔をしながら石垣を降りて往ったが、其のうちに彼方あっちこっち此方から松蔵の傍へ人夫たちが来はじめた。人夫の中には鉄鎚かなづちを手にした者もあった。権兵衛と総之丞は黙ってそれを見ていた。

松蔵の傍へは五十人ばかりの人夫が集まって来て、それが松蔵を囲んで頭を並べた。松蔵の話がはじまったところであった。

暫くすると其の人夫の中に、不意に口を開けて黄色な歯を見せる者があった。何かを笑っているところであろう。権兵衛は眼を見すえた。見すえる間もなく、人夫は松蔵の傍を離れて散らば

って往った。総之丞は権兵衛に呼びかけた。

「話がすんだようでございますが」

「うん」

権兵衛は人夫の方から眼を放さなかった。総之丞もそれに眼をやった。人夫はまた右側の礁の方へ往って、どっかんどっかんとやりだしたが、釜礁にかかる者はなかった。

「かからんようでございますが、話が判りますまいか」

「判らん、困ったものじゃ」

おろか

「愚な者どもでございますから、物の道理が判りません」

「うん」

権兵衛は眼をつむっていた。総之丞は口をつぐんだ。陸の方から堰堤の上をどンドン駆けて来た者があった。普請役場の小廝に使っている武次と云う 壮佼 であった。

「旦那、一木の旦那」

いき

武次は呼吸をはずまして額に汗を浸ませていた。権兵衛は武次を見た。

「何か用か」

「用どころか、お殿様じゃ」

権兵衛は眼を睜った。

「なに、おとのさま」

「二十人も三十人も馬に乗って、氏神様のお神行のようじゃ」

「藩公が来られたか」

「はんこうか、鮫鱈か知らんが、高知の城下から来たそうじゃ」

ほんと

「真箇か。真箇ならお出迎いをせんといかんが」

はやかわ

「早川さんが、早く往って呼うで来いと云うたよ、早川さん、齒の脱けた口をばくばくやって、

周章てちよる」

「くだらん事を云うな」

権兵衛は叱りつけておいて陸の方へ急いだ。其の時沙と礁の破片を運んでいた人足の群も、陸の方に異状を認めたのか、皆陸の方を見い見い口ぐちに何か云っていた。権兵衛は其の人夫の間を潜って陸の方へ往った。

磯の沙浜には 処どころ 筆草が生えていた。其処は緩い傾斜になって夫其の登り詰に松林があり普請役場の建物があった。其の役所の向前は低い丘になって、其処に 律照寺 と云う寺があったが、浜の方から其の寺は見えなかった。其の律照寺は四国巡礼二十五番の納経所で、室戸岬の丘陵の附根にある最御崎寺の末寺で、普通には津寺の名で呼ばれていた。

権兵衛は役所の近くまで往った。其処に二疋の馬がいて傍に陣笠を冠った旅装束の武士が二人立ち、それと並んで権兵衛の下僚の者が二三人いた。権兵衛は急いで陣笠の武士の傍へ往った。武士の一人は国老の孕石小右衛門であった。

「これは御家老様でございますか」

「おお、権兵衛か」

うけたま  
「承 かりますれば、殿様がお成りあそばされたそうで、さぞお疲れの事と存じます」

ごびこう  
「なに、急に御微行になられる事になって、今朝城下を出発したが、かなりあるぞ」

「二十里でございますから、お疲れになりましたでございましょう、それで殿様は」

ひがしでら  
「東寺 へずっとお成りになった」

東寺は最御崎寺の事で、其処は四国巡礼二十四番の納経所になり、僧くうかい 空海 が少壮の時、参禅すほう 修法した処であった。

「それでは、私もこれからお御機嫌を伺いにあがります」

「今日は来いでもええ、明日此処へお成りになる事になっておる」

「さようでございますか、それでは、今日はさし控えておりましたようか」

「それがええ」それから物をあざけ 嘲 るような眼つきをして、港の方へあご 頤 をやって、「権兵衛、池が掘れかけたようじゃが、彼処へあすこ こい ふな 鯉 を飼うか、鮒 を飼うか」

それは無用の港を開設するのを嘲っているようでもあれば、工事の遅延して港にならないのを嘲っているようでもあった。小右衛門は同行の武士を見た。それはおおしままさへい うまわり 大島政平 と云うお 馬廻 であった。

「政平、どうじゃ」

にっ  
政平は莞とした。

「なるほど」

まんごのうお  
「それとも、万劫魚 でも飼うか」権兵衛の方をちらと見て、「今に大雨が降りゃ良え池ができる」

ことば いみ  
権兵衛は小右衛門の 詞 の意がはっきり判った。権兵衛はじっと考え込んだ。小右衛門と政平の二人は、すぐ馬の傍へ往って馬に乗った。

「権兵衛、精出して池を掘れ」

権兵衛が驚いて挨拶しようとした時には、馬はもう走っていた。権兵衛を追って来て遠くの方に控えていた総之丞が其の時寄って来た。

「殿様は、どうなされました」

権兵衛は何も云わなかった。

#### 四

権兵衛は普請役場の内にあるじぶん へや 己 の室にいた。其処は八畳位の畳も敷き障子も入っているが、壁は板囲の山小舎のような室であった。そして、室の一方には蒲団を畳んで積み、衣類を入れたつづら よろいびつ てんしょうだいじんぐう 葛籠 を置き、鎧櫃 を置き、三尺ばかりの狭い床には 天照大神宮 の軸をかけて、其の下に真さかき 新しい 榊 をさした徳利を置いてあった。権兵衛は其の床の前の小机の傍にいた。其の小机には半紙を二枚折にしたよことじ 横綴 の帳面を数冊載せてあった。

権兵衛は思い詰めた顔をして考えこんでいたが、やがて何か考えついたようにして手を鳴ら

した。するとすぐ近くで返事があって、廊下にした板の間へ顔を出した者があった。磯山清吉

と云う下僚したやく わか こがらで壮い小兵な男であった。

「お呼びになりましたか」

「呼んだ」

「何か御用でございますか」

「総之丞はおるか」

「浜の方へ出て往きましたが、何か御用が」

「それじゃ、総之丞でなくてもええ、神様のお祭をするから、白木の台と、あ、台は普請初めの時にこしらえたものがある、それから雉子きじか山鳥が欲しいが、それは無いかも知れんから、鶏の雌と雄を二羽買い、蜜柑も柿もあるまいから、芋でも大根でも、畑に出来る物を三品か四品。

幣束しでも要る、皆みんなと相談して調ととのえてくれ」

「何時いつお祭をします」

「すぐ今晚するから急いでくれ」

「何処でします」

「港の口じゃ。供物が出来たら、港の口へ幕を張って、準備したくをしてくれ」

「よろしゅうございます」

清吉が往こうとすると権兵衛が留めた。

「待て」

「へい」

「それから、供物の台は、沖の方へ向けて、つまり海の方へ向けるぞ」

「承知しました」

「普請初めの時のようにすればええ。判らん処があれば、総之丞が知っておる、総之丞に聞け」

「よろしゅうございます」

「それから、松明たいまつの準備したくもしておいてくれ」

落日に間のない時であった。清吉は急いで出て往った。権兵衛は腕組みして考えこんだ。廊下へ武次がどかどかと来た。

「旦那、湯が沸いたが」

権兵衛は顔をあげた。

「湯か」

「後がつかえるから、早はよう入ってもらいたいが」

「俺は今日は、入らん、今井いまいさんに入れと云え」

「殿様が来ておるに、湯に入あかって垢を落とせばええに」

武次はまだ何か云いながら往ってしまった。権兵衛は口元に苦笑をからめたが、すぐまた考えこんだ。

その時浜の方で法螺ほらの音がしはじめた。人夫に仕事おを措かす合図であった。仕事を措いた人夫がやがやが囁囁云いながらあがって来た。人夫は地元の者もあれば、隣村の者もあり、また遠くから来て小舎掛をして住んでいる者もあった。

間もなく夜になった。其の夜は月がないので暗かった。其の夜の八時すぎになって堰堤の突端いつつに松明の火が燃えだした。其処には 明珍長門家政 作の 甲冑みょうちんながといえまさ かっちゅう つ を著けて錦の小袴はを穿き、それに 相州行光 作の太刀そうしゅうゆきみつ はを佩いた権兵衛 政利まさとしが、海の方に向けてしつらえた祭壇の前にひざまずいていた。そして、其の周囲には一木家の 定紋まわり じょうもんの附いた紫の幔幕まんまくを張りめぐらしてあった。「どうか私の此の体を犠牲いけにえに御取りくださいませ、釜礁かまばえを除くお赦ゆるしを得とうございます」  
下僚したやくたちは権兵衛が云いつけてあるので何人も傍に来ている者がなかった。

「此の礁が一日も早く除れまして、此の荒海を往来する諸人もろびとをお助けくださいますようお願いいたします。こうして犠牲いけにえに献あがりました私の生命いのちは、速刻お召しくださいますも厭いとうところでございませぬ」

権兵衛は一人で朝まで祈願をこめていた。朝になって室戸岬の沖あいから朝陽きらきらが杲杲と登りかけたところで、人夫たちが集まって来た。

人夫たちは左右の堰堤を伝じぶんって己の持場につこうとしていた。礁の方にかかっている五六十人ばかりの人夫は其処からおりるべく祭壇の近くへ来た。それと見て権兵衛は幔幕の一方を解いて姿をあらわした。人夫たちは甲冑の武者を見て驚きの眼をそばだてた。

「あ」

「何事じゃ」

「何人じゃ」

「彼の鎧武者は」

権兵衛は腰にさしている軍扇をさっと拵げた。それは赤い日の丸の扇であった。

「来い」

人夫たちは権兵衛と云う事を知ったので安心して傍へ寄った。権兵衛は凜りんとした顔をした。  
「皆みんなよく聞け、拙者は此の釜礁じぶんが割れないから、己の身を竜王様に 献たてまつって、何時いつなんどき此の生命いのちをお取りくださされてもかまいませんから、釜礁のを一刻も早く取り除けるようにしてくださいと、昨夜の八時すぎから一睡もせずゆうべ かつつに願がんをこめたから、其の方たちにはもうおかまいがない」

人夫たちの中に 囁ささやきが起った。権兵衛は呼吸を調えた。

「それに殿様も、此の普請を御心配なされて、昨日、御微行でお成りになったから、今日は此処へ御検分にお成りになる。それで皆みんなも気をいれかえて、新らしい気もちになってかかれ、決して其の方たちにお咎めはない、お咎めがあれば拙者せっしゃじゃ」

人夫たちの眼は活いきいきとした。権兵衛は軍扇を揮ふった。

「それでは、かかれ、かかれ」

人夫たちはわっと歓声をあげながら、勇みたって下へおりて往った。総之丞はじめ五六人の

したやく

下僚が来ていた。総之丞は前へ出た。

「一木殿お疲れでございましょう、さあ、どうぞお食事を」

「飯は後でええ、此処をかたづけてくれ」

そこで総之丞はじめ下僚は幔幕を畳み、祭壇の始末をはじめた。権兵衛は釜礁の方を見おろしていた。

釜礁の方には、もうどっかんどっかんの音が盛に起っていた。それに交ってじゃりじゃりじゃりと砂を掘る音も聞えて来た。箆ざると箕あじかの群はまた蟻のように陸おかへ往來をはじめた。

空には何時の間にか 翳雲いわしぐもが出て、それが網の目のように行当岬の方へ流れていた。その時釜礁の方に当って歓声があがった。それは仕事の上の喜びにあがった歓声のようであった。権兵衛はじっと眼を見すえた。石を砕く音がやんで、其処には数人の者が手をあげて、はしゃいでいるのが見られた。

どっかんどっかんの音はまた聞えだした。権兵衛はやはり釜礁の方を見ていた。と、また其処から歓声があがった。今井武太夫ぶだゆうと云う老年としよりの下僚したやくが傍へ来た。

「あれは何でございましょう」

武太夫は視力が鈍いので遠くが見えなかった。権兵衛はそれを知っていた。

「礁とがうまく除れておるじゃないか」

「そうでございませうか、それは結構なことです」

「うむ」

二人の人夫が石垣はを這はってあがって来た。組頭の松蔵とらたろうとこれも組頭の一人の寅太郎の二人であった。松蔵はにこにこしていた。

「旦那、神様のお蔭がございませうよ」

「そうか、割れるか」

「どんどん割れます、今、関ときの声があがりましたろう」

「あがった」

「あれでございませうよ、最初なんか、児鯨こくじらほどの物が割れましたよ」

「児鯨はぎょうさんが、そうか、そうか、それはよかった」

「此のむきなら、十日もやれば、割れてしまいますよ」

「大きな礁じゃ、そう早くもいくまいが、緒口いとぐちが立てば大丈夫じゃ」

## 六

権兵衛は二番鶏を聞いて起きた。其の晩は夕風ゆうなぎで風がすこしもなかったの、寝苦しくておちおち眠れなかったが、室津を引きあげる事になっているので、努めて起きて朝食を食うなり出発した。

外はまだ微暗うすぐらだったが、さすがに大気は冷えていた。権兵衛は二匹の馬に手荷物を積み、二三したやくの下僚つを伴っていた。下僚の中には総之丞もいた。

権兵衛は悩まされた釜礁かまばえが除れて、工事が思いの外とに捗はかどり、間もなく竣成しゅんせいしたので、高知

の藩庁に報告する必要から、急いで引きあげて行くところであった。其の時権兵衛が新港開鑿に要した夫役はぶやく一百七十三万人役で、費用は十万二千五百両であった。それは野中兼山が寛永の古港を改修して、中掘普請と云っているに対して次普請と云われた。其の港は今、室津港と云われている。

沖の方が荒れているのか、波の音に狂いがあった。権兵衛は並んで歩いていた総之丞に声をかけた。

「今日は暑いぞ」

「そうでございますよ、彼の波の音があ曲者くせものでございますよ」

「そうじゃ、波の音がいかんぞ」

砂路の右側にはわらぶき藁葺の小さな漁師の家が並び、左側にはおぎ荻ややぶ雑木の藪が続いていた。漁師のうち家にはもう起きて火を焚いている処があった。

「やっぱり早いな」

「これまで、普請で、仕事がありました、これから当にならん漁に出んとなりませんから、気が気じゃございませんよ」

「其のかわり漁があれば、一日で一箇月分の夫役になるじゃないか」

「それがなかなかそういきませんから、漁師は昔から貧乏と相場が定まっておりますよ」

「そうか、そうかも知れん」

一行は室津の部落を離れて浮津の部落へかかっていた。其の時、右側の漁師の家から小さな老人が出て来て空を見た。

「さにしがせりよる、朝のうちに一網やろうか」

それは地曳網を曳こうと云っているところであった。そして、権兵衛と総之丞が近ぢかと寄つて往くと、老人は驚いたようにして家の内へ入って往ったが、家の中から、

「普請方のお役人がいに帰よる」

と云う声が聞えた。総之丞は笑った。

「御存じでございませぬか、今の男は、夫役に来て縄をな縛うておりました者でございますが」

「そうか気が注つかざったが、彼の鼻のひしゃげた老人か」

老人かと云うなり権兵衛は体を崩して倒れてしまった。総之丞は驚いて駈け寄った。

「いかが如何なされました」

権兵衛は右脇を下にして倒れていた。

「一木殿、気を確に一木殿」総之丞はしゃが蹲んで権兵衛の肩へ手をかけて、「如何なされました」

権兵衛は体をくねらすなり俯向きになった。

「しび五体が痺れた」

「痺れた、御病気でございませぬか」

「病気かも知れんがおかしいぞ」

「何か食物たべものの啖くいあわせではございませぬまいか」

「其の方たちと同じ物を啖ったじゃないか、他には何も啖わん、啖いあわせなら其の方だちも同じようになるはずじゃが」

「そりゃそうでございます。それでは、とにかく、気つけをあげましょう」

「そうじゃ、拙者の印籠に気つけがある、取ってくれ」

「よろしゅうございます」

したやく

伴れの下僚も傍へ来て心配そうに権兵衛を見ていた。総之丞はそれに眼をつけた。

「水を汲んで来てもらいたいが」

か

下僚の一人は彼の老人の家へ往った。総之丞は権兵衛の腰につけた印籠を取って、其の中から薬を出したところへ彼の下僚が茶碗に水を容れて引返して来た。総之丞は其の水を取って薬とともに権兵衛の口へやった。

「さあ、どうぞ」

権兵衛は口をもぐもぐさして飲んだ。

「御苦労、御苦労」

「御気分は如何でございます」

「気分は何ともない、筋のぐあいであろう」

「それでは、馬にお乗りになりますか」

「馬には乗れまい、今日は引返そう」

じぶん へや

間もなく権兵衛は戸板に載せられて引返して来たが、普請役場の己の室へおろされたところで体の痺れはすっかり除れていた。そこで権兵衛は起ってみた。起っても平生のとおりで体に異状はなかった。

なお

「おかしいぞ、何ともない。これならもうすこし休んでおったら、癒ったかも判らなかった」

其処には総之丞がいた。総之丞は権兵衛に馬をすすめた事を思いだした。

か

「彼の時、馬にお乗りになったら、よかったかも知れませんよ」

「そうじゃ、馬に乗って往けば、そのうちに癒ったにきまっておる」

翌日になって権兵衛はまた出発した。そして、また浮津に往って彼の老人の家の前まで往った。総之丞は権兵衛の右側を歩いていた。

「此処でございましたよ」

うなず

権兵衛も頷いた。

「そうじゃ」

老人の家は其の朝は、まだ戸が開いていなかった。

「今日は、まだ起きておりませんよ」

総之丞は権兵衛の返事を聞こうとしたが、返事がないのでちらと見た。権兵衛の体は其の時よろよろしていたが、其のうちに倒れてしまった。

「一木殿、一木殿、また痺れでも」

あおむけ

しら

権兵衛は仰臥になっていた。夜はもう白じらと明けていた。

「一木殿、御気分は」

権兵衛は眼を開けた。

「気分は何ともない」

「それでは、また気つけでも」

「いや、待て」

と云って権兵衛は眼をつむって何か考えるようにした。

「それでは、馬にお乗りになりますか」

「すこし考える事がある、気の毒じゃが、また戸板へ載せて引返してくれ」

権兵衛はまた戸板に載って引返したが、帰りついてみると体は元のとおりになっていた。そこで権兵衛は己じぶんの代理として、総之丞に二三の下僚をつけて高知へやり、己は普請役所に留まとどこおっていると、十日ばかりして下僚の一人が引返して来て、藩庁の報告は滞りなく終わったと云った。

それは延宝七年六月十六日の事であった。権兵衛は其の時、普請役所に残っていた武太夫を呼んだ。

「釜礁かまばえを割る時に、願をかけて、其のままになっておる。今晚は其の願ほどきをする、準備をしてくれ」

武太夫も願のかけっぱなしはいけないと思った。

「早速そういたしましょう、願のかけっぱなしはいけません」

「それでは頼む」

武太夫が出て往くと、権兵衛は一枚の半紙を取って筆を走らせ、それを封筒に容れて表に津寺方丈御房つでらほうじょうごぼうと書き、そして、それを硯すずりの下へ敷いた。

口上書を以て 残候事のこしそうろうこと

港八九は成就じょうじゆに至いたり候得共前度殊の外入口六ヶ敷候に付増夫入而相支候得共至而

難題至極もうしと申此上は武士之道之心得にも御座候得ば神明へ捧命そうらえ申処ほうめいもうすところの誓言せいげんすなわち則御見分

の通とお遂ほんいとげ本意そうろうこと候事たいえつせっしゃほんかい一日千秋の大悦拙者本懐之至り死後御推察可被下候いた不具くださるべく

十六日

一木権兵衛政利 花押かおう

津寺方丈 御房

其の夜は月があつたが黒い雲が海の上に垂れさがつていたので暗かつた。八時すぎになつて港の左側の堰堤たいまつの上に松明の火が燃えだした。其処には権兵衛が最初の祈願の時の武者姿で、祭壇を前ぬかにして額ぬかずいていた。

「わたくしの体が痺れたは、竜王が犠牲いけにえをお召しになる事と存じますから、喜んで此の身をさしあげます」

権兵衛はまず胃かぶとを除とつて海へ投げた。蒼黒い海は白い歯を見せてそれを呑んだ。権兵衛はそれから鎧よろいを解いて投げた。胃も鎧も明珍長門家政の作であつた。権兵衛はそれから太刀を投げた。太刀は相州行光の作であつた。

翌朝になつて下僚したやくの者が往つたところで、権兵衛は祭壇の前で割腹していたが、未明に割腹したものと見えて、錦の小袴を染めている血あたたかに温みがあつた。

村の者はそれと聞いて慟哭どうこくした。そして、血に染まった権兵衛の錦の小袴を小さく裂いて、家

の守神にすると云って皆<sup>みんな</sup>で別けあうとともに、その遺骸を津寺に葬って香華<sup>こうげ たや</sup>を絶さなかった。

それが明治維新になって、神仏の分離のあった時、其の墓石を地中に埋めて、其の上に一宇<sup>う</sup>の  
祠<sup>ほこら</sup>を建てて一木神社として祭ったが、昭和四年になって、後<sup>うしろ</sup>の山を開いて社を改築し、墓石も  
掘り出すとともに、傍<sup>かたわら</sup>に記念碑まで建立<sup>こんりゅう</sup>した。

其の記念碑の表面は、伯爵<sup>はくしゃくたなかこうけん</sup>田中光顕先生の筆で、「一木権兵衛君遺烈碑<sup>いれつひ</sup>」とし、裏面には土  
佐<sup>せきがくてらいしまさはる</sup>の碩学寺石正路先生の選文がある。

火傷した神様

あまつかみくにつかみ やまのかみうみのかみ きのかみ くさのかみ  
 天津神国津神、山之神海之神、木之神草之神、ありとあらゆる神がみが、人間の間を姿を見せていたころのことであった。

いずのくに くのみやさま あが  
 その時伊豆国に、土地の人から 来宮様 と崇められている神様が<sup>なり</sup>あった。  
 伝説にもその神様がどんな風采をしていたと云うことがないから、それははっきり判らないが、ひどく酒が好きであったと云うところからおして、体が大きくてでっぴりと肥り、顔は顔で<sup>あか</sup>赭く、それで頬の肉がたるみ、そして、二つの眼は如何にも柔和で、すこしの濁気のない無邪気な光を<sup>た</sup>湛えていたように思われる。

その来宮様は、某日例によってしたたか酒を飲んで帰って来た。その時は師走の寒い日であったが、酒で体が温まってほかほかしているので、寒さなどは覚えなかった。  
 「ああ佳い気もちだ、人間どもは、逢う者も逢う者も、首をすくめ、水漬をたらして、不景気な顔をしているが、ぜんたい、どうしたと云うのだ」

来宮様の眼には、路傍の<sup>みちばた</sup>枯草がみずみずした緑草に見え、黄いろになった木の葉の落ちつくした<sup>はだかぎ</sup>裸樹が花の咲いた木に見えていたのであろう。

「こんな、佳い日に、人間どもは、何をあくせくしているのだ」  
 来宮様はそうそうろうろうとして歩いた。それを見て土地の者は土地の者で、  
 「今日も来宮様は佳い気もちになって、歩いてらっしゃるが、此の寒いのに、あんな容をして、寒いことはないだろうか」  
 と云う者もあれば、

「そこが酒だよ、酒をめしあがりゃ、寒いも暑いもないさ。酒は天の美祿だと云うじゃねえか」  
 と云うようなことを云って笑う者もあった。さて来宮様は、土地の人間どもの寒そうな顔をして、あくせくしているのを憐みながら己の<sup>じぶん すまい</sup>住居の近くへ帰って来た。其処は森の中で、入口には古ぼけた木の<sup>とりい</sup>華表があった。来宮様はその時ひどく眠くなっていた。

「ああ、眠い、眠い、眠くてしかたがないぞ」  
 夢心地になって華表の下まで来たところで、もう一歩も歩かれなくなったので、そのまま其処へころりと寝てしまった。

ちょうどその時、二人の旅人が華表の近くへ来て休んでいたが、あまり寒いので、一方の旅人が、

「どうだ、火を<sup>た</sup>焼こうか」  
 と云うと、一方の旅人も、  
 「いいだろう」

と云って、さっそく二人で枯枝を集め、腰の燧石で火を出して、それを枯枝に移して暖まりながら話しこんでいるうちに、強い風が吹いて来た。旅人はあわてて、  
 「こりゃ、いかん」

「燃えひろがっては、たいへんだ」

と云って、二人で火を踏み消そうとしたが、火は消えないでみるみる傍の枯草に燃え移り、それから立木に燃え移った。旅人はますますあわてて、木の枝を折って来て叩き消そうとしたが、火はますます燃えひろがるばかりで、手のつけようがなかった。

「こりゃ、いかん、村の者に見つかったら、たいへんだ」

「そうだ、たいへんだ、逃げよう」

二人はしかたなしに逃げて往った。その時来宮様に使われている雉きじがいた。雉は森へ火の移ったのを見ると、これも旅人以上に驚いて、御殿の前へ往ってはらはらしていたが、神様のことも心配なので、華表の処まで来たところで、来宮様は暢気のんきそうに華表の下で 躰いびきをかいて眠っていた。雉はまあなんという暢気な神様だろうと呆れたが、ぐずぐずしてられないので、

「たいへんです、たいへんです、神様、火事です、たいへんです」

と云って 狂気きちがいのようになって叫んだが、来宮様はいっこうに起きない。火はもう傍へ来て、今にも華表に燃え移りそうになって来た。雉は気が気ではない。

「たいへんです、たいへんです、起きてください、起きてください、神様、火事です、火が燃えつきます、神様」

雉の声がやっと通じたのか、来宮様はううと云うような 唸うなり 声を出した。雉は此処ここぞと思って

「起きてください、火事です、火が燃えつきます、たいへんです」

と叫ぶと、来宮様はやっと眠りからさめかけた。

「うう、うう、ううん」

「ううんじゃありません、火事です、たいへんです、起きてください」

「やかましい、たれだ」

「たれもかれもありません、そんなことを云ってる場合じゃありません、起きてください、たいへんです」

「雉か」

「雉ですから、早く起きてください、たいへんです」

「なにがたいへんだ、そうぞうしい。それより、咽喉のどがかわいた、水を一ぱい持って来い」

「だめです、そんな暢気なことを云ってちゃ、焼け死にます、早く起きてください」

「酒を飲んで焼け死ぬる奴があるか、水を持って来い」

火はもうその時華表とりいに燃え移っていた。雉は半狂乱になっていたが、大きな胴体をしている来宮様を抱いて往くことができなかった。

「早く、早く、早く起きないと、焼け死にます、早く、早く」

「なにを、そんなにあわてるのだ」

来宮様がやっと正気になって、顔をむつつりあげた時には、もう華表は一面の火になっていた。それにはさすがの来宮様も驚いて逃げようとしたが、 焰ほのお に包まれたので逃げるができなかった。

そこへ土地の者がかけつけて来て火を消し、来宮様を御殿へ伴れて往っていろいろ介抱したが、火傷やけどがひどかったので、それがためにとうとう歿なくなってしまった。

その来宮様のいた処は、今のしずおかけんかもごおりしもかわづむら やづ静岡県加茂郡下河津村の谷津であった。某年の十二月二十日あるとし  
 比、私は伊豆の下田へ遊びに往ったついでに、その谷津へ往ったことがあった。

谷津には温泉があった。私は下田からの乗合自動車に乗った。その途中には共産村として有名しらはまむら  
 な白浜村などがあった。

河津川の口で自動車をおりて、川土手をすこし往くとすぐ谷津であった。その付近は昔の河津そう そがものがたり とりい かわづはちまんぐう  
 の荘で、曾我物語に縁古のある土地であった。路の左側に石の華表のある社は、河津八幡宮で  
 、元の祭神は天児屋根命あまこやねのみこと さぶろうすけやす すけなり ときむねであったが、後に河津 三郎祐泰 及びその子の祐成、時致の三人を  
 合祀したものであった。そこには館の内と云う小字があつて、祐泰の宅趾やしきあとと云われ、祐泰の力  
 持をしたと云う石もあった。

ちょうど午で、私は温泉宿に入つて、一ふろあびて一ぱいやるつもりをしていたが、さて何処どこ  
 へ往つていいのか見当がつかない。何人かによさそうな家を聞いてはいろいろと思つておると、温  
 泉宿のじょちゆう婢らしい女が前を往くので、

「もし、もし」

と云つて呼びとめ、

「このあたりで、何という家がいいのでしょうか」

と云つと、女は、

「さあ、何処がいいでしょうね」

と云つた。私は女が己じぶんの家をほめることも出来ないが、それかと云つて他へ客をやりたくも  
 ないと云う気もちでいることを知つた。そこで私は、

「姐さんの家は、何処だね」  
ねえ うち どこ

と云つと、女は、

「中津屋でございます」  
なかつや

と云つた。私はさつそく中津屋へ往くことにして女つに跟着いて往つた。「やつがはし」とした  
 小溝こどぶにかけた橋を右にして、新道を折れると温泉街であつた。

私は中津屋へ入つて、まず温泉に入り、それから二階へあがつて雑記帳あを啓けておると、彼の  
 女おんなが来て、

「御飯はどういたしましょう」

と云つた。私は飯の注文をして、

「ついでに一本持つて来てもらおうか」

と云つた。

すると女はにやりと笑つた。

「お気のどくですが、来宮様のお祭でございますから、旦那は御存じでしょう」

と云つた。私は何も知らないので、

「何も知らないが、来宮様のお祭つて、なんだい」

と云うと、女はまたにやりと笑って、

「御存じでしょう、旦那は」

と云って、私がしらばくれているような云い方をするので、

「知るものか。なんだい、来宮様がなんだい」

と云うと、女ははじめて私が何も知らないことを知ったのか、

「御存じないですか。来宮様は、お酒が好きで、酒を飲んで、寝ておりますと、火事になって、

<sup>とりい</sup>火が華表の傍まで燃えて来ても眼が覚めんものですから、鳥が来て起してくれましたが、起きられ<sup>やけど</sup>ないで、火傷をしましたから、それで、暮れの十七日の夜の十二時から、むこう一週間、酒を飲まんことになっております」

と笑い笑い云った。

「そうかい、そいつはいかな」

「お気のどくですが、それで、来宮様のお祭には、この土地では、一切酒を飲まないことになっておりますから」

「それじゃ、酒がなくてはられない者は、どうするのだ」

「その方は、他の村へ往くのですよ」

「そうか、それじゃだめだね、今日は」

「お気のどくですが」

一ぱいやろうと思って楽しみにしていた私も、あきらめるより他にしかたがなかった。

「それじゃ、しかたがない、飯だけ」と云ってから、「しかし、これが<sup>まいげつ</sup>毎月だと、金がのこるなあ」

酒ぬきの飯<sup>く</sup>を喫った私は、其処<sup>べり</sup>を出て河津川縁に往き、其処の橋を渡って上流<sup>かわかみ</sup>へ往って、田の中の森にある<sup>くのみやじんじゃ</sup>来宮神社へ往ってみた。

# 雪女

たまがわ べり ちょうふ みのきち きこり さきやま  
多摩川縁になった 調布 の在に、巳之吉という若い木樵がいた。その巳之吉は、毎日木樵頭の  
もさく つ わたし  
茂作に伴れられて、多摩川の渡船を渡り、二里ばかり離れた森へ仕事に通っていた。

ある冬の日のことだった。平生のように二人で森の中へ往って仕事をしていると、俄に雪が降  
りだして、それが大吹雪になった。二人はしかたなしに仕事を止めて帰って来たが、渡頭へ来て  
みると、渡船はもう止まって、船は向う岸へつないであった。

二人はどうにもならないので、河原の船頭小屋へ入った。船頭小屋には火もなく、二畳ほどの  
板敷があるばかりであった。

二人はその板敷の上へ蓑みのを着て横になったが、昼間の疲れがあるのですぐ眠ってしまった。  
そのうち巳之吉は、寒いので目をさました。小屋の戸が開け放しになっていて雪がさかんに舞  
いこんでいた。

「茂作さんが外へ出たのか」

巳之吉は茂作の方を見た。其処には真白い衣服きものの女がいて、それが茂作の上へのしかかって、  
その顔へ呼吸いきを吐きかけていた。巳之吉は驚いて声を立てようとした。と、女は茂作を棄てて巳  
之吉の上へ来た。それは白い美しい顔であったが、眼が電いなずまのように鋭かった。

巳之吉は衝き飛ばして逃げようとしたが、体も動かなければ声も出なかった。女はその時はじ  
めて巳之吉の貌かおに気が注いたようにした。巳之吉は田舎びなんに珍しい女童びなんであった。

「この事を何人にも話しちゃいけないよ、もし話したら、お前さんの命はないよ、判ったね、忘  
れちゃいけないよ」

女はそのまま巳之吉を放れて戸外そとへ出、降りしきる雪の中へ姿を消していった。

巳之吉ははね起きた。そして、戸をぴしゃりと閉めて、背でそれを押えながら茂作の方を見た

。「も、も、茂作さん」

茂作は返事をしなかった。巳之吉はおそろおそろ茂作の傍へ往って、茂作を揺り起そうとし  
たが、茂作は氷のように冷く硬ばっていた。巳之吉はその場に倒れてしまった。

翌朝あくるあさ になって、巳之吉は船頭に気つけの水を飲まされて我れに返った。船頭は村の者と呼ん  
で来て、ともども巳之吉をその家へ運んで往って、事情を聞いたが、巳之吉は何も云わなかった

巳之吉はそれから永い間床についていたが、やっと体の具合がよくなったので、一人でまた森  
へ通うようになった。そして、渡頭わたしば の船頭小屋の傍を往復するたびに、白い衣服の女の事を思い  
だして恐れた。

そのうちに一年ばかり経った。それは 木枯こがらし の寒い夕方であった。巳之吉は森からの帰りに渡船  
に乗ったところで、風呂敷包を湯とんがけにした田舎娘わたしが乗っていた。手足のきゃしゃな色の白  
い娘であった。

渡船をあがった巳之吉は、その娘と後になり前さきになりして歩いていたが、そのうちに並んで歩

くようになった。巳之吉は娘の素性が知りたかった。

「お前さんは、<sup>どこ</sup>何処だね」

娘は<sup>むさし</sup>武蔵の奥の者で、両親に死に別れ、他に身寄もないので、わずかな知人をたよりに、江戸へ女中奉公の口を探しに往くと云った。

巳之吉は女のたよらない身の上を聞くと気のどくになった。そこで自分の家の前まで来ると、「今晚はわっしの家へ泊って、明日ゆっくり行きなすったら」

娘はすぐ巳之吉の<sup>ことば</sup>詞に従った。娘はお雪と云う名であった。巳之吉の母親は、巳之吉からお雪の事を聞いてお雪を家へ置く事にした。

お雪が家にいるようになってから巳之吉はしごく元気になった。

やがて、巳之吉とお雪は夫婦になった。お雪は母親をひどく大事にした。

「ほんとに良い嫁が来てくれた、おまえたちは、いつまでも仲よく暮しておくれよ」

お雪は次つぎに十人の子供を産んだ。子供たちはみんな色が白くて、木樵の子のようではなかつた。そのうえ、お雪は十人も子供を産んだにもかかわらず、<sup>ようぼう</sup>容貌は巳之吉の所へ来た時と同じようにわかわかした。

「お雪さんは、わしらとは違ってる、あれは人間じゃないよ」

村の女たちは陰口を利きあった。

幸福な月日がまた何年か経って、木枯の吹く冬が来た。ある夜お雪は、いつものように子供たちを寝かせた後で、針仕事をはじめた。<sup>あんどん</sup>行燈の燈は浮きあがるようにお雪の綺麗な顔を見せていた。巳之吉はぼんやりと炉端に坐って、見るともなしにお雪の顔を見ているうちに、昔船頭小屋で見た奇怪な白い衣服の女のことを思いだした。

「おい、お雪、お前がそうしているところは、昔、おれが会った女にそっくりだぜ。お前も白いが、その女の顔は、とっても白かったぜ」

「話しておくれよ、その女の事を」

「それがさ、ほんとに鬼魅のわるい話だよおまえ。<sup>きも</sup>肝をつぶしちやいかんぞ」

巳之吉は大吹雪のこと、船頭小屋へ泊ったこと、茂作の奇怪な最期などを<sup>こま</sup>細ごまと話した。「その女の顔の白さったら、なかったぜ。あんまり不思議なことだから、夢じゃなかったかと考えて見るがな、何にせい、ああして茂作どんが取り殺されたところを見ると、やっぱりあれが雪女ってものだろう、なあ」

お雪はいきなり手にしていた縫物を投げすてるなり、つかつかと巳之吉の前へ来て<sup>すご</sup>凄<sup>いかずち</sup>い雷のような目をして巳之吉を見た。

「そりゃわたしだよ。あの時、あんなに約束してあるのに、お前さん、よくも約束を破ったね。だが、もうお前さんをどうもしないよ、そのかわり子供を可愛がっておくれ、いいかい。もしわたしの子だからって、ひどい目に会わしたら、その時こそ、判ったねお前さん」

声の終りの方が風のようにかすれた。かと思うと、お雪の身体はぼうと白い霞のようになって、そのまま天窓から出て往った。

# 幽霊の衣裳

三代目尾上菊五郎おのえきくごろうは怪談劇の泰斗として知られていた。其の菊五郎は文化年代に、鶴谷南北つるやなんぼくの書きおろした『東海道四谷怪談』を木挽町こびきちょうの山村座やまむらざで初めて上演した。其の時菊五郎はお岩いわと田宮の若党たみや小平わかとうこへい、及び塩谷浪人えんや佐藤与茂七さとうよもしちの三役を勤めたが、お岩と小平の幽霊は陰惨を極めたもので、当時の人気に投じて七月の中旬から九月まで上演を続けた。

其の後天保てんぼうになって菊五郎は、堺町さかいまちの中村座なかむらざの夏演戯なつしばいで亦『四谷怪談』をやる事になり、新機軸を出すつもりで、幽霊の衣裳に就いて考案したが、良い考えが浮ばなかった。

ちょうど其の時、中村座に関係していた蔦芳つたよしと云う独身者どくしんものがいた。それは、演戯茶房蔦屋しばいちややつたやの主翁ていしゆの芳兵衛よしべえと云う者であったが、放蕩ほうとうのために失敗して、吉原角町河岸よしわらすみちょうがしの潰れた女郎屋つぶあきだなの空店を借りて住んでいた。

蔦芳は中村座の開場が近くなったので、毎日吉原から通っていたが、某日浴衣あるひゆかたが汗あせになったので、更衣するつもりで二階きがえの昇口あがりぐちへ往ったところで、壮い男わかが梯子段はしごだんへ腰こしをかけていた。蔦芳は自分にことわらないで、あがりこんでるのは何人だろうと思って見たが、夕方たれで微暗うすぐらいではっきり判らなかった。

「おい、おめえは何人だ、其処たれにいちゃ邪魔そこにならあ」

気の強い蔦芳は、いきなり足で其の男けを蹴けっておいて二階へあがり、俳優やくしゃのお仕着しきせの浴衣とを執とって来たが、おりる時にはもう其の男は見えなかった。

それから五六日して蔦芳は、亦またか彼のわか壮い男が便所の口くちに立たっているのを見たので、其の日中村座へ往って其の事を話した。

小屋の者はそれを菊五郎に話した。幽霊の衣裳を考案していた菊五郎は、早速蔦芳を自宅へ呼んで、今度出たら着附きつけを良く見ておいて知らしてくれ、骨折賃こせちんを二両出そうと云った。其の時の二両は可成な金であるから、蔦芳は喜んで幽霊の出現を待っていた。

すると中村座の初日の二日前ねの夜、其の幽霊が蔦芳の臥ふている部屋へぬうと現れた。蔦芳はしめたとおいて能く見た。二十四五の壮い男で、衣服きものは浅黄木綿あさぎもめんの三つ柏かしわの単衣ひとえであった。蔦芳は夜の明けるのを待ちかねて、菊五郎の許もとへ駆けつけた。菊五郎はそこで小平の衣裳を浅黄木綿あさぎもめん石持こくもちの着附しばいにして、其の演戯はくに出たので好評を博した。

蔦芳の見た幽霊は、蔦芳が後で調べてみると、其処わかいしゆの女郎屋わかいしゆの壮わかいしゆい男わかいしゆであった。其の壮わかいしゆい男わかいしゆは、徳蔵とくぞうと云うのは、病氣びんぎの親おやに送おくる金かねに困こまって客きやくの金かねを一歩盗ぬすんだ。因業者いんごうもので通とっていた主翁ていしゆは、それを突き出したので徳蔵は牢屋らうやに入れられ、其のうちに病死びんじしたが、其の徳蔵とくぞうが曳ひかれて往いく時着ときていた衣服いふくは、店みせの妓おんながやった浅黄木綿三つ柏あさぎもめんの単衣ひとえであった。

ごとうけんえんぎよく  
(悟道軒円玉氏談)

# 阿芳の怨霊

よしへい おく  
由平は我にかえってからしまったと思った。由平は怯れた自分の心を叱って、再び身を躍らそうとした。と、其の時背後の方から数人の話声が聞こえて来た。由平は無意識に林の中へ身を隠した。間もなく由平の前に三人の人影が現われた。それは宇津江帰りらしい村の 壮佼<sup>うづえ わかいしゅ</sup>であった。壮佼たちは何か面白そうに話しながら通りすぎた。由平はほっとした。

そこ あつみぐんいずみむら えこま くへい  
其処は愛知県渥美郡 泉村 江此間の海岸であった。由平は其の村の油屋九平の娘の阿芳と心中を企てたのであったが、泳ぎを知っていたので夢中で泳いだものらしく、我にかえった時には、自分一人だけが波打際に身を横たえていた。由平は阿芳だけ殺してはすまないと思って、三度海の方へ歩いて往ったが、黝<sup>くろ</sup>ずんだ海の色を見ると急に怖気がついた。由平はじっとしてられないので村の方へ向って走った。

翌朝阿芳の死体は漁師の手で拾いあげられた。由平と阿芳の間は村の人だちにうすうす知られていたもので、村の人だちの眼は由平に集った。由平は居たたまらなくなったので、二三日して村を逃げだした。

よしだ わらじ  
村を逃げだした由平は、足のむくままに吉田へ往って、其処の旅宿へ草鞋を解いた。宿の 婢<sup>じょちゆう</sup> は物慣れた調子で由平を二階の間へ通した。

「直ぐ御食事になさいますか」

「さあ、たいして腹も空いていないが、とにかく持って来てもらおうか」

婢が去ると、由平はごろりと其処へ寝転んだ。由平は将来を考えているところであったが、由平の懐中には二十円ばかりの金しかなかった。しかし、何をするにしても二十円の金では不足であった。由平は考えれば考えるほど前途が暗かった。

「お待ちどおさま」

婢に声をかけられて由平は身を起した。由平の前には二つの膳が据えてあった。由平は婢が感違いをしたろうと思った。

ここ  
「おい、此処は一人だよ」

「でも奥さんは」

「冗談じゃない、俺は一人だよ」

つ  
「でも、さっき、たしかにお伴れ様が」

へや あたり  
婢は不思議そうに室の中を見廻した。由平も不思議に思って四辺を見た。由平の隣には別に座蒲団が一枚敷いてあった。婢は其の座蒲団へ手をやった。

「今まで其処にいられましたが」

「え」

そぶり  
由平はぎょっとしたが、そんな素振を見せてはならぬ。

「そんな事があるものか、そりゃ何かの間違いだろう」

きみ  
婢は不思議そうな顔をして膳をさげて往った。由平は鬼魅がわるかったが、強いて気を強くして箸を執った。そして、椀の蓋を取ろうとしたところで、別な蒼い手がすうっと来て由平の手を押えた。由平ははっとして顔をあげた。由平の前に若い女が坐っていた。それは死んだはずの阿芳であった。阿芳の顔は蒼くむくみあがって、衣服はぐっしょりと濡れていた。由平は椀を取っ

て阿芳の顔へ投げつけた。椀は壁に当って音をたてた。由平は続けて手あたり次第に膳の上の茶碗や小皿を投げた。其の物音に驚いて主翁<sup>ていしゅ</sup>があがってきた。

「どうなさったのです」

主翁は怒っていた。由平ははっとして我にかえった。

「鼠<sup>うる</sup>が出て来て煩さいから、追ったのだよ」

「鼠ぐらいで、そう乱暴されちゃ困ります」

主翁は小言を云いながら出て往った。由平はそこで元気をつけるために酒を喫<sup>の</sup>んだ。酒に弱い由平は一本ですっかり酔って床の中へ入った。そして、眼を覚ましたのは夜半の一時<sup>ごろ</sup>比であった。由平は咽喉<sup>のど</sup>が乾いたので水差を取ろうとした。すると由平の指に水に濡れた布片<sup>ぬのぎれ</sup>のような物が触れた。由平はおやと思って眼をあげた。其処には何人か<sup>たれ</sup>が立っていた。

「何人だ」

それは阿芳の姿であった。燈の無い真暗の室<sup>へや</sup>の中で阿芳の姿ははっきり見えた。

「又、出たな」

由平は飛び起きた。床の間の鹿の角<sup>かたなかけ</sup>の刀架に一本の刀が飾ってあった。由平はそれを取って阿芳に斬りつけた。刀は外れて襖<sup>ふすま</sup>へ<sup>あた</sup>的<sup>あた</sup>った。其の音を聞きつけて婢が飛んで来た。

「来たな」

由平は婢の肩端<sup>かたはじ</sup>へ斬りつけた。婢は悲鳴をあげて倒れた。婢の悲鳴を聞きつけてあがって来た主翁<sup>ていしゅ</sup>は、由平の<sup>うしろ</sup>後<sup>すく</sup>から抱き縮めようとした。由平は腰をひねって主翁を振りはなして、逃げようとする主翁に背後から血刀を浴びせた。主翁は廊下へ半身を出して倒れた。同時に由平の体はよろめいて前へ泳ぎ、主翁の死体<sup>つまず</sup>に躓<sup>つまず</sup>いて往来へ転がり落ちた。由平は刀を下敷にして死んだのであった。

それから何年か経って、由平の姪<sup>めい</sup>が<sup>ある</sup>某製糸工場の女工になって、寄宿舎に寝っていると、某夜廊下に人の<sup>あしおと</sup>蹠音<sup>あしおと</sup>がして障子が開いた。姪は驚いて其の方へ眼をやった。其処には男の姿があった。姪は驚いて咎めようとしたが声が出なかった。そんなことが三晩続いた。姪は鬼魅悪くなって寄宿舎を逃げ出そうと思ったが、ふと其の男を何処かで見たとあるような気がしたので、いろいろと考えているうちに、それは叔父の由平に似ているのだと云うことに気がついた。そこで彼女は早速寺へ往って叔父のためにお経をあげてもらった。すると、其の夜から男の姿が現われないようになった。

阿芳の自殺した江此間の海岸は、今は海水浴場になって、附近には立派な別荘や旅館などが建っているが、阿芳の投身したと云われる所は、三百坪ばかりの空地になっていて、何人<sup>たれ</sup>もそれに手をつける者がなかつた。万<sup>もし</sup>一手<sup>た</sup>をつける者があると阿芳の怨霊<sup>たれ</sup>に崇<sup>た</sup>られると云われていた。

阿芳の怨霊の事は、明治の終り比までは有名であったが、其の後は次第に忘れられていた。ところで、昭和二年の夏になって、又其の話がむしかえされるようになった。それは其の空地で芝居をやったところで、好天気でもあり客は満員の盛況であったが、一幕終った比から天気が急変

して大雨になり、続いて其の翌日も、翌々日も、五日続けて同じような時刻になって雨が降ったので、芝居はめっちゃめっちゃになり、土地の人は阿芳の怨霊をそれに結びつけたのであった。

# 法華僧の怪異

よしのぐんわきかみむらかやはら ちげんじ きっしょうそういん  
奈良県吉野郡 掖上村 茅原に茅原寺と云う真宗の寺院があった。其の寺院は一名 吉祥草院  
えんのぎょうじゃ みょうおん  
。其処に 役行者 自作の像があって、国宝に指定せられているが、其の寺院に 名音 と云う老  
尼がいた。

あ いずみ  
私が其の名音に逢った時は、昭和三年で六十位であった。其の名音は、最初 泉の某と云う庵  
にて有徳の住持に事えていた。

つ  
名音が尼僧になったのは、中年になってからで、其の動機に就いては、小説にでもなりそうな  
哀話があるということだが、それに就いては語らなかった。

あるあさいつも  
名音が泉の尼寺へ入って二度目の秋を迎えた時のことであった。某朝 平生のように朝の礼拝  
を終って境内の掃除をしていたが、庭前に咲いた萩の花が美しいので、見るともなしに見てい  
ると、近くの旅館から来た散歩客とでも云うような来客があった。それは三十二三の男と三十七  
八の女であったが、男は大島の着流しでステッキを突き、女は 錦紗 づくめの服装をしていた。

じゅうじさん  
「早朝から恐縮ですが、住持様は、もうお眼覚めでしょうか」

ことば  
男は其のくだけた服装にも似ず、態度や 詞 つきが丁寧であった。名音はこんなに早くては住  
持様が迷惑するだろうと思ったが、男の態度に好感が持てたので、住持に取りついだ。住持は名  
音を信用しているので、すぐ二人を客間へ通した。二人は兄弟で女は男の姉であったが、家庭の  
事情で尼になりたいと云うのであった。

「一口に尼になりたいとおっしゃっても、それは容易なことではありませんからな」

うつむ  
住持は痛ましそうに女の方を見た。其の時まで何も云わずに俯向いていた女が、初めて顔をあ  
げて住持を見た。

「それはよく存じておりますが、私は尼になるよりほかに、救われる道がございません。どんな  
苦行でも難行でもいたします、どうかお弟子にしてくださいませ」

女の弟はそれに続けて云った。

「私も幾度も思いとませようといりましたが、よほど思いつめておりますから、どうか人間  
一人を助けると思って、曲げてお許しを願いたいと思います」

住持はどうしたものだろうかと云うような表情をして名音を見た。名音はそれほど思いつめる  
には、よほど苦しい過去を持っているに違いないと思って、すっかり女に同情してしまった。

き いか  
「住持様、あんなにおっしゃいますから、肯いておあげになっては如何でございます」

「そうじゃな、それでは、こうして頂きましょう。今夜もう一度お考えなすって、それでも決心  
が変らなかつたら、明日改めてお出でを願いましょう」

それを聞くと二人は喜んで帰って往ったが、翌日になって女が移って来たので、住持が最初  
はさみ ていはつ ぎょくおん なにか  
鋏を入れ後は名音の手で剃髪した。其の女は 玉音 という法名が与えられた。名音は何彼と新  
入の玉音のために世話をしてやった。玉音は顔だちも美しく素直な女だったので、住持にも気に  
いられた。名音は此の調子でゆけば、世話の為甲斐があると思って喜んだ。こうして数日すぎた  
よなかごろ いっしょ と  
ところで、夜半比になって玉音が急に苦しみはじめた。一所に寝ていた名音は驚いて躍り起きた  
こくう つか けいれん  
。玉音は両手で虚空を掴み歯を喰いしばって全身を痙攣させた。そして時どき苦しそうな声を出

うめ  
して呻いた。隣室に寝ていた住持も其の声を聞きつけて起きて来た。二人の介抱で玉音の苦しみはすぐ治まった。

なか  
「どうなされた、お肚でも痛まれたか」

ことば あおざ あか  
住持の 詞 に玉音は蒼褪めた顔をちょっと赧らめた。

みほとけ  
「お肚ではございませんが、これが私の持病でございまして、私はこれがあるばかりに、御仏に  
すが  
お縋りする気になったのでございます」

「御仏も御仏じゃが、医者にかかれては」

「医者にもかかりましたが、此の病気ばかりは、医者の方では駄目でございます」

「ほう、では、お医者様にも病名はわからぬのじゃな」

玉音は黙ってうなずいた。名音は其の病気には何か訳がありそうだと思ったが、強いて聞くこともできなかつた。玉音は其の夜をはじめとして毎夜のように苦しんだ。名音は其の度に眼を覚まして介抱したが、しだいに慣れて後には玉音の苦しむのも知らずにいるような事があつた。

あるひ だんか たいや い  
某日住持は檀家の待夜に招かれたので、名音も其の供をして往つたが、意外に手間取つて歸つたのは夜の十二時過ぎであつた。住持は直ぐに寢室に入ったが、名音は便所へ行きたくなつたので、土間続きの便所へ往つて、歸りに手を洗おうとしたところで、自分の傍を通り抜けた者があつた。名音はぎよつとして其の方へ眼をやつた。鼠色の法衣を着て腰に太い紐を巻いた法華  
うしろ  
僧の背後姿が見えた。名音は驚いて声をかけようとした。其の瞬間、法華僧は縁側へあがつて往つたが、それは影の動くようでやがてぱつと消えてしまつた。名音は変だから続いて縁側へ駈け  
へやへや きみ  
あがつて、室々の障子を開けて見たが怪しい男の姿は見えなかつた。名音は鬼魅が悪いので自分の室へ入るなり寢床の中へもぐりこんだ。しかし、法華僧が気になつて容易に眠られなかつた。

あくるあさ いつも  
翌朝 になつて名音は、平生のように起きて朝の礼拝を終り、前夜の事を住持に話そうと思つていと、玉音が急に緊張した顔になつた。

ゆうべ  
「あなたは昨夜、何か変つた物を御覧になりませんでしたか」

「変つたもの」

名音はすぐ法華僧の事を思いだした。

「法華僧ですか。見ましたよ、あれを御存じ」

とげとげ  
名音の声は 刺々 しかつた。

「では、とうとう御覧になりましたね」

あなた  
「見ましたよ、あれは貴女の何ですか」

か  
「では何も彼も一切お話しいたします」

あ  
「では、やっぱり、彼の人は、貴女の」

「そうですよ。でも、もう此の世の人ではありませんから」

「まあ」

「私は罪の深い女でございます。私は死ぬほどの苦しみを受けなくてはなりません」

「では病気ではないのですね」

しりょう たたり  
「死霊の祟 でございます。私はどんなに後悔しているか知れません」

玉音は地主の娘に生れて従兄弟いとこの弁護士と結婚した。夫婦の間には二人の娘まで出来て、家庭は至極円満であったが、ふとしたことから囲碁に興味を持って、素人碁客ごかくの間では評判になるようになった。そうすると、自分の家ばかりでは満足ができなくなった。彼女は碁会でもあると出かけて行って、終日帰らない事があった。

恰度ちょうど其の比ころ、旦那寺の住職が変って新住職が挨拶に来た。新住職は三十四五の色の白い男で、愛碁家らしいので、早速対局してみると、素人碁客ではあるが彼女よりは遙に強かった。新住職に興味を感じた彼女は、翌日寺へ出かけて行って対局した。結果はやはり前日と同じであった。そこで彼女は、どうかして住職を負かしたいと思って、熱心に研究しながら毎日寺へ通うようになった。時によると朝出かけて夜遅くまで帰らないことがあって、家庭ふうはに風波が起った。

某日彼女と良人との間に、平生あるひのような口論おっとがあった結果、彼女は良人に撲りつけられた腹立いつもちまぎれに、家を飛び出して其の夜は寺へ泊ってしまった。翌日家へ帰ってみると家は空家あげくになっていた。彼女の良人は彼女に愛想をつかして、娘を伴れて何処かへ往なぐってしまっていた。彼女は今更実家へも帰られないので、其のまま寺へ転げこんだ。

彼女の心はすさむ一方であった。彼女は不在がち勝な住職の眼を忍んで、其の寺に同居していた若い青年画家と戯たわむれた。それが住職に知れかかると、住職の不在中、寺の道具や金目な物を売払って、其の青年画家と駈け落ちした。其のことは直ぐに檀家きゆうもんに知れて大問題となり、住職は女に裏切られた苦しさいしと、厳しい檀家のきゆうもん 糺問いしに耐えかねて縊死した。

青年と駈け落ちした彼女は、夜になると住職の怨霊おんりょうに悩まされた。それと見た画家は女の金を奪くらって姿を晦ましてしまった。

彼女は旅館で自殺を計ったが、果さなかった。そして、彼女は其の事を知って駈けつけた弟の家へ引き取られて、それから尼になったものであった。

「私は幾度いくたび、自殺を計ったか知れませんが、罪が深いと見えまして、どうしても死ねないのでございます」

名音は其の事を住職に話して玉音のために祈祷きとうしてやったが、玉音の苦しみは去らなかった。そして、一ヶ月ばかりの後に発狂してしまった。名音はそれを私に話した後でこう云った。

「其の後、玉音さんは、弟の家へまた引き取られたそうですが、恐らく彼の病気あは癒らないでしょう。こうしておりましたも、玉音さんの彼の苦しあそうな声と、無鬼魅ぶきみな法華僧の姿が眼の前に浮んで来ますよ」

(玉谷高一氏談)

# 輓轡首

ひご きくちけ いそがいへいたざえもんたけゆき すこぶ むそう さむらい  
 肥後の菊池家に磯貝平太左衛門武行と云う武士があった。頗る豪勇無雙の士であったが、  
 主家の滅亡後、何を感じたのか仏門に入って、<sup>かいりょう</sup>怪量と名乗って諸国を遍歴した。  
<sup>かい</sup>甲斐の国を遍歴している時、<sup>あるひと</sup>某日唯ある岩山の間で日が暮れた。そこで怪量は<sup>かっこう</sup>恰好な場所を見  
 つけて、<sup>おい</sup>笈をおろして横になった。

横になる間もなく月が出た。その月の光が四辺に拡がったかと思うと、その光の中から湧いて  
 出たように黒い影が現れた。<sup>きこり</sup>木樵らしい男だった。その男は<sup>あわ</sup>周章てたようにして怪量の傍へ往  
 った。

<sup>ここ</sup>「御出家、此处で野宿なさるおつもりか、とんでもないこと、此处は恐ろしい魔所でござるぞ」  
 怪量はおちつきすましていた。

「それは面白い、<sup>きつね</sup>狐が出るか、<sup>たぬき</sup>狸が出るか、それは知らぬが、<sup>へんげ</sup>左様な妖怪変化の出る場所へ野  
 宿してこそ、諸国修行の甲斐があろうと申すものじゃ、かまわぬ、わしにかまわず、そうそう  
 往かっしやい」

男は怪量の顔を<sup>とが</sup>咎めるようにして覗きこんだ。  
 「大胆にも程のあるお方じゃ、此处へ野宿などされたら、それこそじゃ。さいわい近くにわしの  
<sup>あばらや</sup>住いがござる、<sup>あばらや</sup>荒屋ではあれど、此处よりはましじゃ、それに君子は危きに近寄らず、  
<sup>そうじょうまん</sup>増上慢は、<sup>みほとけ</sup>御仏も<sup>いまし</sup>きつくお誠めのはずではござらぬか」

怪量のごそりと起きて笈を肩にした。  
 「それでは一つ厄介になろうかの」  
 「では足元に気をつけて、おいでなされませ」

岩山の間を<sup>よ</sup>攀じのぼって、<sup>と</sup>やがて唯ある頂上の平べったい処へ出た。そこに草葺の家があ  
 って家の中から明るい灯が漏れていた。男は怪量を案内して裏手へ廻って往った。其処にすこし  
 ばかり野菜をつくった畑があり、畑の向うに杉の林があつて、其処から<sup>かけい</sup>筧の水を引いてあつた  
 。二人はその筧の水で足を洗って内へ入った。

<sup>いろり</sup>炉の<sup>まわり</sup>附近に四人の男女が控えて為た。男は怪量を<sup>い</sup>上座へ<sup>じょうざ</sup>請じてから四人を<sup>しょう</sup>揮り返った。  
 「旅の御出家をお伴れ申したのじゃ、御挨拶申せ」

四人の者は交る交る怪量の前へ出て挨拶した。いずれも言葉は上品で態度もいやしくなかつた  
 。その後で女達は怪量に<sup>かゆ</sup>粥の膳を<sup>すす</sup>すすめた。怪量は無造作に粥を<sup>ぬぐ</sup>啜って、終ると口を拭い拭い主  
 人の方を見た。

「御主人、<sup>さきほど</sup>先刻から御容子を伺うに、<sup>ひとはな</sup>どうやら世の常の木樵衆とも見受けられぬ、以前は一花  
 咲かした侍衆が、よくよくの仔細あつての山住いと睨んだが、いかがじゃ」

「<sup>たず</sup>それをお訊ねなされるか」

男は当惑したようにしていたが、やがて思いきったように顔をあげた。

「これも何かの縁、罪障消滅のたしになるかも判り申さぬ、それでは聞いて頂こうか。お察しの通り、以前はさる大名に仕えた侍でござったが、心とした事から酒と女に心を奪われ、結局の果は何んかの者に手をかけて、この地に隠れておる者でござるが、時が経つにつれて浅間しく、邪慾のために、祖先を辱かしたるこの身が恨めしゅう、此の比では、つくづくと後世のほども案じられてなりませぬわい」

「どうやら床しい御仁体と見受け申したが、さては左様でござったか」

怪量は凝と相手の顔を見た。

「いや、若気の誤は人間の常でござるわい、それにしても早くそれに気が注かれたは、まだ御仏の助けの綱の断れぬ証しでござろう。昔のことは昔のこと、此上は御仏にすがって、再び花咲く春を待たるるがよろしゅうござるぞ」

「身に沁みてのお言葉、忝けのうござる」

山上の夜は更けた。女達は次の間へ怪量の衾をのべた。すすめられるままに怪量はその部屋へ入った。

「一夜の礼じゃ、せめて読経致して、主人の苦悩を助けて取らそうか」

枕頭に端座して低声で読経をつづけたが、やがてよして窓を開けた。静な月の下に笥の水音ばかりが四辺の静寂を破っていた。

「咽喉が渴いたようじゃ、彼の水を飲んでまいろう」

怪量は家の者を起さないように、そっと襖を開けて次の間へ出た。その途端に怪量は棒立になった。其処には行燈の燈に照らされて、主人はじめ五つの首のない体がころがっていた。

「はてな、すぐ隣りにいたのに、これは何としたものじゃ」

怪量は四辺に用心しながらその傍へ近づいた。そして、一つ一つ首の附根を改めてみた。首は合せ物が離れたように血の痕もなければ刃物の痕もなかった。怪量の眼が光った。

「轆轤首じゃ、さてはたばかって、わしをおびき寄せたな」

怪量は閃となってそれを見据えたが、やがてその眼がきらりと光った。

「うむ、搜神記か何かで読んだぞ、万一轆轤首の骸を見つけた時、その骸を即刻別の場所へ移しておくがよい、首が骸を移されたのを知れば、恐れ喘いで、三たび地を打って死ぬとあったぞ。よし、妖怪め」

笑が怪量の頬にのぼった。やにわに主人の体を抱きあげたかと思うと、窓を開けて谷底へ投げ飛ばした。投げ飛ばして怪量は家の中を見まわした。戸締は皆中から嚴重に出来ていた。

「さては天窓から出おったか」

怪量はそっと裏口を開けて外へ出た。外の黒々とした杉林の中から話声が聞えて来た。怪量は物陰から物陰を伝ってそれに近づいて往った。

月光の影まばらな林の中には、主人の首をはじめ五つの首が人魂のように飛び廻っていた。み

んな面白そうに笑いながら、<sup>じべた</sup>地上や樹から虫か何かを探して喫<sup>く</sup>っているのであった。

怪量は喰い入るような目で見守っていた。と、主人の首が物を喫<sup>や</sup>うことを止めて他の首を揮<sup>ふ</sup>りかえた。

「そろそろ彼の坊主を啖<sup>あ</sup>いたいのものだな、彼奴め、わしの言葉を真に受けやがって、頼みもせぬ<sup>く</sup>経をはじめおった。経を読<sup>あいつ</sup>んでる間は近寄れないが、もう追っつけ黎明<sup>よあけ</sup>に近い、坊主ももう睡<sup>あ</sup>ったに相違ない、睡<sup>あ</sup>っていたらお前達にも、彼の太<sup>たれ</sup>った旨<sup>あ</sup>そうな奴を啖<sup>たれ</sup>わしてやる、何人が往<sup>たれ</sup>って容子を見て来い」

一つの首が合点合点して舞いあがり、<sup>こうもり</sup>蝙蝠のように家の方へ飛んで往ったが、間もなくあわただしく飛び帰って来た。

「大変じゃ、大変じゃ、彼の坊主の姿が見えませぬぞ、何処かへ往<sup>あ</sup>ってしまいましたぞ、いや、そればかりか、大将の体を奪<sup>あ</sup>って往ったのか、いくら探しても、大将の体は見えませぬぞ」

主人の髪が逆立った。

「なに、おれの体が見えぬ、さては、やられたか」

主人は齒ががちがちと鳴って、その眼からは涙が出た。

「おれは、もう、元もと通りになることができぬ、此処で死ななければならぬ、よくも、人の体を動かしおったな、乞食坊主め。よし彼の坊主を啖<sup>あ</sup>い殺してやる、何処におる、坊主め」

主人の首は空へ舞いあがるなり、恐ろしい形相で四辺を睨<sup>あたり</sup>みまわした。

「おお、其処におる、其処におる、おのれ坊主め、動くな」

ひゅうと風を切って怪量に飛びかかった。それに続いて四つの首も襲<sup>あ</sup>いかかった。

怪量は手ごろの松の木を引っこ抜いて、縦横無尽に振りまわした。四つの首はまたたく間に地上へ落ちたが、主人の首だけは落ちずに、いつまでも怪量に飛びかかっていたが、やがて隙を見つけたのか怪量の衣の袖<sup>く</sup>へ啖<sup>く</sup>いついた。怪量はすかさず鬚<sup>まげ</sup>を掴<sup>まげ</sup>んで力<sup>なぐ</sup>一ぱい撲<sup>なぐ</sup>りつけた。首は一声呻くなりぐったりとなってしまうた。

怪量はそのまま松の木を提<sup>ひっさ</sup>げて家の内へ入って往った。四つの首はもう体へ帰って、血だらけになって呻き苦しんでいた。

「坊主が来た、坊主が来た」

四人は我さきにと飛びだして、杉林の方へ姿を消してしまった。

その時はもう夜がほのぼの明けていた。怪量は松の木をすてて首を衣の袖から離そうとしたが、首はどうしても離れなかった。怪量は笑った。

「貴様はおれと同伴<sup>いっしょ</sup>におりたいか」

怪量は首を袖へつけたままで山をおり、それから信州の諏訪へ出て平気で村から村を托鉢<sup>すわ</sup>してまわった。

血で汚れた鬼魅<sup>きみ</sup>悪い首を見て女達は逃げ走った。村の騒ぎが大きくなったので、土地の役人が出て来た。

「坊主、その首はどうしたものじゃ」

怪量はにこにこするのみで何も云わなかった。役人達は怪量を不敵な曲者として捕え、翌日

しらす  
白洲へ引き出した。

「売僧、その袖の首は、何としたものじゃ、僧侶の身にあるまじき くせごと 曲事、ありてい 有体に申せばよし、  
いつわ 偽り申すとためにならぬぞ」

怪量は役人を見て笑った。

「いや、これは轆轤首と申す ばけもの 妖怪の首でござる。これへついておるのは、妖怪の方から勝手に く 啖  
いついたまでで、拙僧の知ったことではござらぬ」

怪量は詳しく当時の模様を はな 話した。時どき自分で おかし 可笑くになると見えて大声を出して笑った。怪  
量を取り調べていた役人は同僚と何か相談した。そして、向き直って怪量を睨みつけた。

「売僧、そのような むけい 無稽な申し立て、此処では通らぬぞ、察するにその方、僧侶の身にあるまじ  
せつしょう き殺生を犯した故、死者の もうしゅう 妄執 とど 晴れやらず、それへ止まっておるに相違あるまい、ところ 処の法  
しおき に照らして所刑する」

「いや待たれい」

その時まで控席に黙々としていた年老いた役人が進み出た。

「まだ御詮議不充分と見受け申す、一応、首を改めて見ましようぞ」

老役人は下役人に云いつけて、衣ごと首を手元へ取り寄せて見守っていたが、やがて驚いたよ  
うに顔をあげた。

「これこそ、まごう方なき かた 轆轤首、なんぼういぶつし 南方異物志に、轆轤首の うなじ 項には赤い文字が見られるとあ  
るが、御覧なされい、これこの通りじゃ、また、離れ口が木の葉の自然と枝から離れたるがごと  
かい き模様といい、それに甲斐の国には、昔から轆轤首がおると申すから、まさしくこれは轆轤首、  
ごそう それなる御僧の申し立ては、いつわりではござらぬぞ」

役人達は、顔を見合わせた。老役人は怪量の方へ膝を進めた。

「旅の御僧、もはやそなたへの疑いは晴れ申したが、さるにても、かよう 斯様は怪物を見事に御退治め  
よのつね されたとは、尋常の出家ではござるまい、お差しつかえなくば、ぞくみょう 俗名をうけたまわりたい」  
怪量は微笑した。

「疑いが晴れて何よりでござる、お訊ねを受けて名乗る程の者でもござらぬが、いかにも以前は  
たず 弓矢取る身、九州菊池の一党にて、磯貝平太左衛門武行が成れの果てで は ござりますわい」

「なに、磯貝平太殿」

役人達は顔色をかえた。ちんぜい 鎮西の剛の者磯貝平太の名は、この地まで聞えていたのであった。

役人達は あわて 慌て白洲へ飛び降りて、怪量の いまし 縛めを解いて無礼を詫びた。

## 二

やがて怪量は こくしゅ 国守の やかた 館へ呼ばれて滞在数日、無上の面目を ほどこ 施して出発した。  
それから三日目の深夜、怪量は木曾の山中を歩いていた。

突然木立の間から怪しい漢おとこが白刃おどを手にして躍り出た。

「坊主、身ぐるみ脱いで失せおろう」

怪量あいてはちらりと対手を身あいて [#「身」はママ]ながら衣を脱いでさしだした。

山賊はすぐ衣の首つに気が注いで、その首と怪量の顔を見比べていたが、何と思ったのか飛びしさってひれ伏した。

「仮父おやぶん、飛んだ見損ないをいたしました、御勘弁を願います、これこの通りでござります」

怪量は面白そうに山賊を見た。

「何じゃ、どうしたのじゃ、人を裸はだかにしておいて謝る奴があるか」

「いいえ、めっそうもない」

山賊は頭かを搔いた。

「こんな度胸おやぶんしゅうのいい仮父衆おやぶんを、ただの乞食坊主と間違えて、穴があつたら入りたいくらいでござります、それにしても仮父おやぶん、人を殺して、衣の袖へその首おどを付けて脅しの道具にするたあ、うまい術てもあつたものだ、どうでしょう、俺のこの着物へ五両つけて仮父おやぶんに差しあげますから、首の附いたその衣を俺に譲ってもらいたいものだが」

「なに、首を譲ってくれ、欲しくばやるが、これは人間の首ではないぞ、妖怪ばけものの首じゃぞ、普通の者では扱いかねる代物じゃが、それでよいか」

「人が悪いや、人を殺して、首を袖につけて、そのうえ人をからかうのだもの、それでは仮父おやぶん、この通り、五両と着物をさしあげます、冗談じょうだん云わないで、早いとここれで手を打ってくだせえまし」

「そうか、それほどまでに所望しょうぼうなら代えてやろうか、じゃが、五両出して妖怪ばけものの首を欲しがる奴は、天下広しといえども貴様かただけだろうよ、自由にせい」

### 三

首と衣を手に入れた山賊は、暫くその二品ふたしなを資手もとでに、木曾街道の旅人おどを劫していたが、間もなく諏訪すわの近くへ往いって首の由来を聞いた。山賊は青くなった。

「やっぱり坊さんの云つたことが真箇ほんとうだったのか、飛んでもない、こんな首を持っていたら、どんな祟りを受けるか判らぬ。せめてこれを体いっしょと同体にしてやって、祟りのないようにしてもらおう」

山賊は話うちに聞いた山の中へ入って、怪量が泊つたと云う轆轤首うちの家を探しているうちに、やっと探しあてたが、其処には轆轤首の体は一つもなかった。

「仕様があない、せめて首だけでも此処へ葬ってやれ、それにしても彼の坊さんは、妙な坊さんだ、ひょっとしたら、あれは、おれに悪事を止めろっていう、仏のお使いかも判らないな」

首を埋めて塚を築くと、山賊は首をひねりひねり其処のちのよを立ち去った。その塚は後世まで残って

いて『ろくろ塚』と呼ばれていた。

# 円朝の牡丹燈籠

はぎわらしんざぶろう まごだな ともぞう つ やなぎしま よこかわ い  
 萩原新三郎は孫店に住む伴蔵を伴れて、柳島の横川へ釣りに往っていた。それは五月の  
 初めのことであった。新三郎は釣りに往っても釣りに興味はないので、吸筒すいづつの酒を飲んでいた。

新三郎は其の数ヶ月前、医者坊主の山本志丈といっしょに亀戸へ梅見に往って、其の帰りに志丈の知っている横川の飯島平左衛門と云う旗下の別荘へ寄ったが、其の時平左衛門の一人娘のお露つゆを知り、それ以来お露のことばかり思っていたが、一人でお露を尋ねて行くわけにもゆかないので、志丈の来るのを待っていたところで、伴蔵が来て釣りに誘うので、せめて外からでも飯島の別荘の容子ようすを見ようと思って、其の朝神田昌平橋かんだしょうへいばしの船宿から漁師を雇って来たところであった。

新三郎は其のうちに酔って眠ってしまった。伴蔵は日の暮れるまで釣っていたが、新三郎があまり起きないので、

「旦那、お風をひきますよ」

と云って起した。新三郎はそこで起きて陸へ眼をやると、二重の建仁寺垣があって耳門くぐりもんが見えていた。それは確に飯島の別荘のようであるから、

「伴蔵、ちょっと此処ここへつけてくれ、往ってくる処ところがあるから」

と云って船つを著けさして、陸へあがり、耳門の方へ往って中の容子を伺っていたが、耳門の扉が開いているようであるから思いきって中へ入った。そして、一度来て中の方角は判っているので、赤松の生えた泉水の縁へりについて往くと、其処そこに瀟洒しょうしゃな四畳半の室へやがあって、蚊帳かやを釣り其処そこにお露あおが蒼い顔をして坐っていた。新三郎は登音あしおとをしのばせながら、折戸の処へ往った。と

、お露が顔をあげて此方こっちを見たが、急に其の眼がいきいきとして来た。

「あなたは、新三郎さま」

お露も新三郎を思きやまって長い間気病いとのようになっているところであった。お露はもう慎みを忘れた。お露は新三郎の手を執とって蚊帳の中へ入った。そして、暫しばらくくしてお露は、傍にあった香箱を執とって、

「これは、お母さまから形見にいただいた大事の香箱でございます、これをどうか私だと思って」

と云って、新三郎の前へさしだした。それは秋野に虫の象眼の入った見ごとな香箱であった。新三郎は云われるままにそれふたをもらって其の蓋ふすまを執とってみた。と、其処へ境の襖を開けて入って来たものがあふたった。それはお露の父親の平左衛門であった。二人は驚いて飛び起きた。平左衛門は持っていた雪洞ほんぼりをさしつけるようにした。

「露、これへ出ろ」それから新三郎を見て、「其の方は何者だ」

新三郎は小さくなっていた。

「は、てまえは萩原新三郎と申す粗忽そこつものでございます、まことにどうも」

平左衛門はおこ憤いきって肩で呼吸をしていた。平左衛門はお露の方をきっと見た。  
「かりそめにも、天下の直参の娘が、男を引き入れるとは何ごとじゃ、これが世間へ知れたら、飯島は家事不取締とあって、家名を汚し、御先祖へ対してあいすまん、不孝不義のふとどきものめが。手討ちにするからさよう心得ろ」

新三郎が前へ出た。

「お嬢さまには、とがすこしも科はございません、どうぞてまえを」

「いえいえ、わたしが悪うございます。どうぞわたしを」

お露は新三郎をかばった。平左衛門は刀を脱ぬいた。

「不義は同罪じゃ、娘からさきへ斬る」

平左衛門はそう云いながら、いきなりお露の首に斬りつけた。お露の島田首はしまだくびころりと前へ落ちた。新三郎が驚いて前へのめろうとしたところで、其のほお頬に平左衛門の刀が来た。新三郎は頬からあご腮にかけて、ずきりとした痛みを感じた。

「旦那、旦那、たいそううな驚びっくされてますが、おっそろしい声をだして、惻びっくりするじゃありませんか、もし旦那」

新三郎は其の声に驚いて眼を開けた。伴蔵がまくらもと枕頭へ来て起しているところであった。新三郎はあたりきよろきよろと四辺を見まわした。

「伴蔵、おれ俺の首が落ちてやしないか」

「そうですねえ、船べりで煙管を叩くと、よく雁首がんくびが川の中へ落ちますよ」

「そうじゃない、俺の首だよ、何処にも傷が附いてやしないか」

「じょうだん云っちゃいけませんよ、何で傷がつくものですか」

やがて新三郎は船を急がせて帰って来たが、船からあがる時、

「旦那、こんな物が落ちておりますよ」

と云って、伴蔵のさしだした物を見ると、それはさっき夢の中でお露から貰かった彼の秋草に虫の象眼のある香箱の蓋であった。

## 二

新三郎はしょうりょうだな精霊棚したくの準備ができたので、縁側へ敷物を敷き、そして、蚊遣かやりを焚たいて、深草形うちわの団扇で蚊を追いながら月を見ていた。それは盆の十三日のことであった。新三郎はその前月、久しぶりに尋ねて来た志丈から、お露がじぶん己の事を思いつめて、其のために病気になって死んだと云うことを聞いたので、それ以来お露のぞくみょう俗名うつを書うついて仏壇に供え、来る日も来る日も念仏を唱えながら鬱うつとして過しているところであった。

と、生垣の外からカラコン、カラコンと云う下駄の音が聞えて来た。新三郎はやるともなしに其の方へ眼をやった。三十位に見えるおおまるまげ大丸髻としまの年増が、其のころ比流行はやったちりめんざいく縮緬細工の牡丹燈籠を

持ち、其の後から文金の高髷たかまげに秋草色染きの衣服ぬりえを著、上方風うちわの塗柄の団扇うちわを持った十七八に見え  
るきれいな女ひぢりめんが、緋縮緬ながじゅばんの長襦袢すその裾わかをちらちらさせながら来たところであった。新三郎は其の  
わかに

強い女わかに何処かに見覚えのあるような気がするので、伸びあがるようにして月影にすかしてい  
ると、牡丹燈籠こちらを持った女が立ちどまって此方を見たが、同時に、  
「おや、萩原さま」

と云って眼みはを睜じょちゆうった。それは飯島家のよね婢なのお米であった。  
「おやお米さん、まあ、どうして」

新三郎は志丈からお露が死ぬと間もなくお米も死んだと云うことを聞いていたので、ちょっと  
不思議に思ったが、すぐこれはきっと志丈がいいかげんなことを云ったものだろうと思って、  
「まあお入りなさい、其処の折戸をあけて」

と云うと二人が入って来た。後のわか強い女はお露であった。お米は新三郎に、  
「ほんとに思いがけない。萩原さまは、お歿なくなり遊ばしたと云うことを伺っていたものでござ  
いますから」

と云った。そこで新三郎は志丈の云ったことを話して、  
「お二人が歿なくなったと云うものだから」  
と云うと、お米が、  
「志丈さんがだましたものですよ」

と云って、それから二人が其処へ来た理わけを話した。それによると平左衛門のめかけ妾くにのお国が、  
あるひ某日新三郎が死んだと云ってお露を欺ましたので、お露はそれを真まに受けて尼になると言いだし  
たが、心さえ尼になったつもりでおればいからと云ってなだめていると、今度は父親が養子まを  
したらと云い出した。お露はどんなことがあっても婿まはとらないと云って聞かなかつたので、と  
うとう勘当同様になり、今では谷中の三崎でだいなしうちの家を借りて、其処でお米が手内職などを  
して、どうかこうか暮しているが、お露は新三郎が死んだとのみ思っているので、毎日念仏ばかり  
唱えていたのであった。そして、お米は、

「今日は盆あっちこっちのご事でございますから、彼方此方おまいりをして、晩おそく帰るところでございます」  
と云った。新三郎はお露が無事うれでいたので喜しかった。

「そうですか、私はまた此のとおり、お嬢さんの俗名を書いて、毎日念仏しておりました」  
「それほどまでにお嬢さまを」思い出したように、「それでお嬢さまは、たとえ御勘当になりま  
しても、斬きられてもいいから、萩原さまのお情を受けたいとおっしゃっておりますが、今夜お泊  
め申してもよろしゅうございましょうか」

それは新三郎も望むところであったが、ただ孫店に住むはくおうどうゆうさい白翁堂にんそうみ勇齋と云う人相観が、何かにつ  
けて新三郎の面倒を見ているので、それに知れないようにしなくてはならぬ。

「勇齋と云うやかましやがいますから、それに知れないように、裏からそっと入ってください」

そこでお米はもじもじしているお露うながを促うながして裏口から入り、とうとう其処で一泊した。そ  
して、翌日はまだ夜の明けないうちに帰って往ったが、それからお露は毎晩のように新三郎の処  
へ来た。ちょうど七日目の夜であった。孫店に住む伴蔵は、毎夜のように新三郎の家から話声が

聞えて来るので、不思議に思いながら新三郎の家へ往って、そっと雨戸の隙間から覗いてみた。  
ひよくござむか  
比翼産を敷いた蚊帳の中には、新三郎が壮い女と対いあって坐っていた。伴蔵は目を睜った。と、其の時女の声で、  
「新三郎さま、私がもし勘当されました時は、お米と二人をお宅へおいてくださいます」  
すると新三郎の声で、

「引きとりますとも、あなたが勘当されたら、私はかえってしあわせですよ。しかし、貴女は一人娘のことですから、勘当される気づかいはありますまい。後になって、生木を裂かれるようなことがなければと、私はそれが苦勞でなりません」

「あなたより他に所天はないと存じておりますから、たとえお父さまに知れて、手討ちになりましてもかまいません、そのかわり、お見すてなさるとききませんから」

伴蔵は女の素性が知りたかった。伴蔵は伸びあがるようにして、もいちど雨戸の隙間から室の中へ眼をやった。島田齧の腰から下のない骨と皮ばかりの女が、青白い顔に鬢の毛をふり乱して、それが蠟燭のような手をさしのべて新三郎の頸にからませていた。と、其の時、傍にいた丸齧の、これも腰から下のない女が起ちあがった。同時に伴蔵は眼さきが暗んだ。

### 三

伴蔵は顫いながら家へ帰り、夜の明けるのを待ちかねて白翁堂勇齋の家へ飛んで往った。そして、まだ寝ていた勇齋を叩き起した。

「先生、萩原さまが、たいへんです」

勇齋は血の気のない伴蔵の顔をきっと見た。

「どうかしたのか」

「どうのこうのって騒ぎじゃございませんよ、萩原さまの処へ毎晩女が泊りに来ます」

「壮い独身者のところじゃ、そりゃ女も泊りに来るだろうよ。で、その女が悪党だとでも云うのか」

「そう云うわけではありませんが、じつは」

伴蔵はそれから前夜の怪異をのこらず話した。すると勇齋が、

「此のことは、けっして人に云うな」

と云って、藜の杖をついて伴蔵といっしょに新三郎の家へ往った。そして、いぶかる新三郎に人相を見に来たと云って、懐から天眼鏡を取り出して其の顔を見ていたが、  
「萩原氏、あなたの顔には、二十日を待たずして、必ず死ぬると云う相が出ている」  
と云った。新三郎はあきれた。

「へえ、私が」

「しかたがない、必ず死ぬ」

そこで新三郎が何とかして死なないようにできないだろうかと云うと、勇齋が毎晩来る女を遠ざけるより他に途がないと云ったが、新三郎は勇齋がお露のことを知るはずがないと思っている

ので、

「女なんか来ませんよ」

と云った。すると勇齋が、

「そりゃいけない、昨夜見た者がある、あれはいったい何者です」

新三郎はもうかくすことができなかつた。

「あれは牛込の飯島と云う旗下の娘で、死んだと思っておりましたが、聞けば事情があつて、今では婢のお米と二人で、谷中の三崎に住んでいるそうです。私はあれを、ゆくゆくは女房にもらいたいと思っております」

「とんでもない、ありや幽霊だよ、死んだと思ったら、なおさらのことじゃないか」

しかし、新三郎は信じなかつた。勇齋は其の顔をじっと見た。

「それじゃ、おまえさんは、その三崎村の女の家へ往つたことがありなさる」

新三郎は無論お露の家は知らなかつた。それに、新三郎は勇齋の態度があまり真剣であるから何となく不安を感じて来た。

「先生、それなら、これから三崎へ往つて調べて来ます」

そこで新三郎は三崎村へ往つた。そして、彼方此方と尋ねてみたが、それらしい家がないので、不思議に思いながら帰ろうと思つて新幡随院の方へ来た。新三郎はもうへとへとになつて

いた。其の新三郎が新幡随院の境内を通りぬけようとしたところで、堂の後になつた墓地に、角塔婆を建てた新しい墓が二つ並んでいた。そして、其処には牡丹の花のきれいな燈籠が雨ざらしになつていた。新三郎の眼は其の牡丹燈籠に貼りついたよになつた。それは彼のお米がお露とともに毎夜点けて来る燈籠とすこしも変わらなかつた。新三郎はもしやと思つて寺の台所へ往つて聞いてみた。すると其処にいあわせた坊主が、

「あれは牛込の旗下で、飯島平左衛門と云う人の娘と、婢の墓だ」

と云った。それを聞くと新三郎は蒼くなつて走つた。そして、其の足で勇齋の処へ往つて右の事情を話した。

「占いで、来ないようにできますまいか」

「占いで幽霊の処置はできん。彼の新幡随院の和尚はなかなか豪い人で、わしも心やすいから、手紙をつけてやる、和尚の処へ往つて頼んでみるがいい」

新幡随院の住持は良石和尚と云つて、当時名僧として聞えていた。新三郎は勇齋から手紙をもらつて良石和尚を尋ねて往つた。良石和尚は新三郎を己の室へ通して其の顔を見ていたが、「おまえさんの因縁は、深いわけのある因縁じゃ、それはただいぢずにおまえさんを思つている幽霊が、三世も四世も前から、生きかわり死にかわり、いろいろの容を変えてつきまとうているから、遁れようとしても遁れられないが」

と云つて、死霊除のお守をかしてくれた。それは金無垢で四寸二分ある海音如来のお守であつた。そしてそれとともに一心になつて読経せよと云つて、兩宝陀羅尼經という經文とお

ふだ  
札をくれた。

新三郎は良石和尚にあつく札を云って帰って来たが、帰ってくると早速勇齋に手伝ってもらって、和尚の云ったようにお札をいたる処に貼り、海音如来のお守を胴巻に入れて首にかけ、蚊帳を釣って其の中で経文を読んでいた。

其のうちに夜になって、カラコン、カラコンと云う下駄の音が聞えて来た。新三郎は一心になって経文を唱えていたが、やがて駒下駄の音が垣根の傍でびたりととまったので、恐るおそる蚊帳から出て雨戸の節穴ふしあなから覗いてみた。いつものようにお米が牡丹燈籠を持っている後に、文金の高髻に秋草色染の振袖きを著たお露が、絵の中から抜け出たような美しい姿を見せていた。新三郎はぞっとした。其の時家うちの周囲に眼をやっていたお米がお露の方を見た。

「お嬢さま、昨夜のお詞ゆうべと違ことばって萩原さまは、お心がわり変あそばして、あなたが入れないようにしてございますから、とてもだめでございます。あんな心の腐った男は、もうお諦めあきらあそばせ」

「あれほどまでにお約束をしたのに、変りはてた萩原さまのお心が情けない。お米や、どうぞ萩原さまに逢わせておくれ、逢わせてくれなければ、私は帰らないよ」

お露は振袖を顔にあてて泣きだした。其のうちに二人が裏口の方へ廻ったようであるから、新三郎は蚊帳の中へ入ってぶるぶると顫えていた。

#### 四

おみねはうす暗い行燈あんどんの下で一所懸命に手内職をしていたが、ふと其の手を止めて蚊帳の中をすかすようにした。処ところどころ紙燃かみよりでくくった其の蚊帳の中では、所天おっとの伴蔵が両手を膝についてきちんと坐り、何かしらしきりに口の裏で云っていた。おみねは所天の態度がおかしいので目を睜めった。と、その時みずみずしい女の声が聞えて来た。おみねはおやと思ったが、そのうちに女の声も聞えなくなったので、そのままにしていると、その翌晩もまたその翌晩も同じように伴蔵の所へ女が来るようであるから、とうとうがまんがしきれなくなった。

「人が寝ないで稼いでいるのに、ばかばかしい、毎晩おまえの所へ来る女は、ありゃ何だね」

すると伴蔵が蒼い顔をして話した。それは牡丹燈籠を点けたお露とお米が来て、新三郎の家の裏うちの小さい窓へ貼はがってあるお札を剥してくれと云って頼むので、明日剥しておくはがと云って約束したが、其の日は畑へ往ってすっかり忘れていたところで、その夜また二人が来て何故剥してくれないかと云った。そこで忘れていたから明日はきっと剥しておくはがと云ったが、考えてみると、いくらなんでもあんな小さい窓から人間が出入のできるものではない。これはきっと幽霊にちがいないから、もしもの事があってはたいへんだと思って、おみねにも話さずにいるとのことであった。

「そんなわけで、おれは此処を引越してしまおうと思うよ」

するとおみねが、

「明日の晩来たら、私ども夫婦は、萩原さまのおかげで、こうやっているから、萩原さまに万一の事があっては、生活くらしがたちませんから、どうか生活のたちゆくようにお金を百両持って来てください。そうすれば、きっと剥はががしておきますと云うがいいよ」

と云った。

その翌日、伴蔵とおみねは新三郎の家へ往って、無理に新三郎に 行水 をつかわすことにして、伴蔵が三畳の畳をあげると、おみねが 己 の家で沸した湯と 盥 を持って来た。そこで新三郎は 衣服 を脱ぎ、首にかけていた彼の海音如来のお守を除った。

「伴蔵、これはもったいないお守だから、神棚へあげておいてくれ」

伴蔵はそれを大事そうに執った。

「おみね、旦那の体を洗ってあげな」

おみねは新三郎の 後 へ廻って洗いだした。そして、何かと云いながら襟を洗うふうをして伴蔵の方を見せないようにした。

其の時伴蔵は彼の胴巻から金無垢のお守を取り出していた。伴蔵とおみねは、お露から百両のお礼をするから、お札の他にお守を隠しておいてくれと云われているので、行水に事よせてそれを盗もうとしているところであった。

伴蔵は海音如来のお守を抜きとると、其のあとへ持って来ていた 瓦 で作った不動様の像を押しこんで、もとのように神棚へあげた。そして、新三郎の行水が終ると、二人はそしらぬ顔をして帰って来たが、帰って来るなり、海音如来のお守を 羊羹箱 の古いのへ入れて畑の中に埋め、今夜はお露たちが百両の金を持って来るから、其の前祝いだと云って、二人でさし 対 して酒を飲んでいた。

其のうちに八つ比になった。そこでおみねは戸棚の中へかくれ、伴蔵が一人になってちびりちびりとやっていると、清水の方からカラコン、カラコンと駒下駄の音が聞えて来たが、やがてそれが生垣の傍でとまったかと思うと、

「伴蔵さん、伴蔵さん」

と云って、お米とお露が縁側へ寄って来た。伴蔵が顫えながら返事すると、お米が、「每晚あがりまして、御迷惑なことを願ひ、まことに恐れいりますが、まだ今晚もお札が剥れておりませんから、どうかお剥しなすってくださいまし」

「へい剥します、剥しますが、百両の金を持って来てくださったか」

「はい、たしかに持参いたしました、海音如来のお守は」

「あれは、他へかくしました」

「さようなれば百両の金子をお受け取りくださいませ」

お米はそう云って伴蔵の前へ金を出した。それはたしかに小判であった。まさか幽霊が百両の金をと内心疑っていた伴蔵は、それを見るときもう怖いことも忘れて、

「それでは、ごいっしょにお出でなせえ」

と云って、二間 梯 を持ち出して新三郎の家の裏窓の所へかけ、顫い顫いあがってお札を引剥がした 機 に、足を踏みはずして畑の中へ転げ落ちた。

「さあお嬢さま、今晚は萩原さまにお目にかかって、十分にお怨みをおっしゃいませ」

お米はお露を促して裏窓から入って往った。

翌朝になって伴蔵は、欲にからんでやったものの、さすがに新三郎のことが気にかかるので、

おみねを伴れて容子を見に往った。

そして、雨戸を開けて中を覗くなり、のけぞるように驚いて白翁堂勇齋の家へ行き、勇齋を伴れて新三郎の家へ取って返した。新三郎は蒲団の中で死んでいたが、よほど苦しんだとみえて、  
虚空を掴<sup>つか</sup>み歯をくいしばっていたが、その傍に髑<sup>どくろ</sup>髑があり、手の骨らしいものもあって、それが新三郎の首にからみついていた。

# 南北の東海道四谷怪談

いとうきへえ うめ つ あさくさ がくどう そば  
 伊藤喜兵衛は孫娘のお梅を伴れて、浅草観音の額堂の傍を歩いていた。其の一行にはお梅の  
 まき いしゃぼうず びせん  
 乳母のお楨と医師坊主の尾扇が加わっていた。喜兵衛はお梅を見た。

「どうじゃ、お梅、今日はだいぶ気あいがよさそうなが、それでも、あまり歩いてはよろしく  
 ない、駕籠かごなど申しつけようか」

「いえ、いえ、わたしは、やっぱりこれがよろしゅうございます」

お梅は己じぶんの家の隣に住んでいる民谷伊右衛門たみやいえもんと云う浪人に思いを寄せて病気になる  
 ころであった。其の伊右衛門は同じ家中かちゆうの四谷左門よつやさもんの娘のお岩いわとなれあいで同棲いっしょになっ  
 ているが、主家の金を横領したので、お岩が妊娠しているにもかかわらず、左門のために二人の仲を  
 さかれていた。乳母のお楨はお梅の母親のお弓ゆみから楊枝ようじを買うことを云いつけられていた。

「お楊枝を買うことを忘れておりました、お慰みに御覧あそばしませぬか」

お楨はお梅をはじめ一行を誘って楊枝店へ往った。楊枝店には前日から雇われている四谷左門  
 の養女のお袖そでが浴衣ゆかたを着て楊枝を削っていた。喜兵衛が声をかけた。

「これこれ、女子おなご、いろいろ取り揃えて、これへ出せ」

お袖は知らぬ顔をしていた。喜兵衛は癩しゃくにさわった。

「此の女めは、何をうっかりしておる、早く出さぬか」

お袖がやっと顔をあげた。

「あなたは、高野こうやの御家中ごかちゆうでござりますね」

「さようじゃ」

「それなれば、売られませぬ」

「なんじゃと」

「御意ぎょいにいらぬ其の時には、どのような祟たたりがあるかも知れませぬ、他でお求めになるがよろし  
 ゅうございます」

尾扇が喜兵衛の後からぬっと出た。

「こいつ出すぎた女め、そのままにはさしおかぬぞ」

傍へ来ていた藤八五文とうはちごもんの薬売なおすけの直助あいきょうが中に入った。

「まあ、まあ、どうしたものだ、そんな愛嬌あいきょうのない」それから尾扇に、「これは昨日雇われた  
 ばかりで、楊枝の値段もろくに判らねえ女でございませぬ、どうかお気にささせないで」

喜兵衛は尾扇を抑えた。

「打っちゃって置くがいい、参詣おさのさまたげになる」

喜兵衛はお梅たちを促うながして往ってしまった。直助は其の後でお袖にからだ。

「お袖さん、大事の体じゃないか、つまらんことを云ってはならんよ。それにしても考えてみ  
 れば、四谷左門の娘御ときよじせつが、楊枝店の雇女あきらになるなどは、これも時世時節と諦めるか。申しお

袖さん、おめえもまんざら知らぬこともあるまい、いっそおれの情婦いろになり女房になり、なっ  
くれる気はないか」

直助はお袖に寄りそうた。お袖はむっとした。

「奥田将監おくだしょうげんさまは、わたしの父の左門と同じ格式、其の将監さまの小厮こものであったおまえが、わ  
たしをとらえて、なんと云うことだ、ああ嫌らしい」

「おまえだって、こんな処へ来る世の中じゃないか、そんな事を云うものじゃねえやな」

直助はお袖の肩へ手をかけた。

「ええもう知らないよ」

お袖は其の手を揮ふりはなして引込んで往った。直助は苦笑した。

「あんなに強情な女もないものだ」

## 二

宅悦たくえつの家では、藤八五文の直助が、奥まった室へやでいらいらしていた。直助はお袖の朋輩から、  
お袖が宅悦の家で地獄かせぎをしていると云うことを聞いて、金で自由にできることならと思っ  
て来ているところであった。其処には行燈あんどんはあるが、上から風呂敷をかけてあるので、室の中は  
真暗であった。

「ぜんたい、どうしたのだ」

其処へお袖が入ってきた。

「おう来たのか、来たのか」

お袖は手さぐりで直助の傍へ寄って往った。

「待ちかねたよ、お袖さん」

「え」

お袖は其処ではお紋もんと云うことにしていたので驚いた。

「驚くこたあねえよ、おれだよ」

お袖は其の声で初めて直助と云うことを知った。

「まあおまえは」

お袖はいきなり起たって障子を開けて逃げた。直助は追っかけた。

「まあ、まあ、お袖さん」

直助はお袖の袂たもとをつかんだ。お袖はもう逃げられなかった。

「なんぼなんでもおまえと此の顔が」

「逢わされねえのはもつともだが、お袖さん、おまえは孝行だのう」

お袖は袂で顔をおおって何も云わなかった。

「まあ坐るがいい、おめえがこんな商売をするのも、みんな親のためだ、おれは何もかも知っ  
ている」

「は、はい」

「だからさ、おれの云うことを聞いて、今日かぎり、きれえさっぱりと足を洗ったらどうだ。こ  
んなことが親御に知れたら、昔かたぎの左門さまじゃ」

「わたしも、それが」

「そうだろうとも」懐の紙入から金を出して、「まあ、此の金で、左門さまに<sup>あわせ</sup> 袷<sup>き</sup>でも買って著せるがいい」

お袖は直助の顔をしみじみと見た。

「すみません」

「なに、そんな遠慮はいらねえ、そのかわり、<sup>あっち</sup> 彼方へ往って、ゆっくり話そう」

「でも、そればかりは」

「いいじゃねえか、いつまでもそうつれなくするものじゃない」

直助はお袖を引っぱるようにして室の中へ入った。其処へ宅悦の女房のお色<sup>いろ</sup>が顔を出した。

「お紋さん、ちょっと」

お袖は困っているところであった。お袖はすぐ起って出て来た。

「なに、おばさん」

「お客さんだよ」

お色はお袖を他の室へ伴れて往った。

「おとなしいお客さんだから、大事にしておやりよ」

お色は其のまま往ってしまった。お袖はちょっと考えていたが、思いきって障子を開けて入った。

「お休みになりまして」

客がもそりと体を動かした。

「一人で寝るくらいなら、こんな処へ来るものか、<sup>こっち</sup> 此方へよんなよ」

お袖は寄らなかった。

「お願いがございます」

「なんだ」

「わたしの家は、もと武家でございましたが、<sup>ようす</sup> 容子あって父が浪人いたしまして」

お袖は<sup>ほんと</sup> 真実と<sup>うそ</sup> 嘘をごっちゃにして、客の同情に訴えて、関係しないで金をもらっていた。

「そう聞けば、気のどくだが、親のために<sup>おいらん</sup> 花魁になる者もある。それとも<sup>いいなずけ</sup> 許婚でもあるのか」

「いえ、そう云うわけでも」

「そんなら何もいいじゃねえか」

客の手がお袖に来た。

「あれ」

お袖は思わず飛びのいた。其のはずみに行燈にかけてあった風呂敷がぱらりと落ちた。同時に二人が声をたてた。

「やあ、そちは女房」

「おまえは、<sup>よもしち</sup> 与茂七さん」

客はお袖の許婚の<sup>さとう</sup> 佐藤与茂七であった。与茂七は主家が断絶して家中の者がちりぢりになった時、それに交って姿をかくしているところであった。与茂七は火のようになった。

「これお袖、このざまはなんだ、男ほしさのいたずらか。あきれて物が云われねえ」

お袖は<sup>くや</sup> 口惜しそうに齒をくいしばった。

「そりゃ、あんまりむごい与茂七さん。おまえこそ、現在わたしと云う女房がありながら、こん

な処へ来なさるとは」

お袖には後暗いことはなかった。二人の心はすぐ解けあった。

間もなく与茂七とお袖は宅悦の家から『藪の<sup>やぶのうち</sup>内』と書いた<sup>ちょうちん</sup>提燈を借りて出て往った。其の時直助が出て二人の後を見送って<sup>きつ</sup>閃となった。

「目あては提燈だ」

### 三

<sup>こじき</sup>乞食に化けて<sup>たんぼみち</sup>観音裏の田圃道を歩いていた庄三郎は、佐藤与茂七に逢って衣服を取りかえた。与茂七は宅悦の家で借りて来た提燈も庄三郎にやって、

「非人に提燈はいらぬもの、これも貴殿へ」

と云って往ってしまった。庄三郎は<sup>じぶん</sup>己の<sup>なり</sup>風采を<sup>ひ</sup>提燈の燈で見、

「こんな<sup>なり</sup>容をして、仲間の乞食に見つかっては大変じゃ」

庄三郎はそれから<sup>ふじごんげん</sup>富士権現の前へ往った。<sup>ほこら</sup>祠の影から<sup>ほおかむり</sup>頬冠した男がそっと出て来て、庄三郎に<sup>ねら</sup>覗き寄り、手にしている出刃で<sup>えぐ</sup>横腹を割った。

「与茂七、恋の仇じゃ、思い知ったか」

頬冠の男は直助であった。直助は『藪の内』と書いた提燈を目あてにしていたので、庄三郎を与茂七とのみ思いこんでいた。

「これでもか、これでもか」

<sup>ざんにん</sup>残忍な直助は庄三郎を<sup>き</sup>斬りさいなんだ。

「これでいい、これでいい」

直助は思いだして出刃を傍の垣根の中へ投げすてた。と、<sup>あしおと</sup>跫音がいりみだれて駈けだして来る者があった。直助はあわてて傍へ身を隠した。それは四谷左門と伊右衛門の二人が、斬りあいながら来たところであった。伊右衛門は途中で左門に逢ったので、お岩を返してくれと頼んだが、左門が承知しないので左門を殺そうとしていた。

「おのれ、老ぼれ」

「おのれ、悪人」

左門は斬られて血みどろになっていた。伊右衛門が追いつがってまた一刀をあげせた。左門は倒れてしまった。伊右衛門はそれに止めをさした。

「強情ぬかした老ぼれめ、刀の<sup>さび</sup>錆は自業自得だ」

其の時傍の闇から直助が顔を出した。

「そう云う声は、たしかに民谷さん」

伊右衛門は直助の方をきつと見た。

「<sup>こもの</sup>奥田の小厮の直助か、どうして此処へ」

其の時向うの方で下駄の音がした。伊右衛門と直助は祠の後へ隠れた。下駄の音は近よって来た。それは<sup>いとだて</sup>糸盾を抱えた<sup>つじぎみ</sup>辻君姿の<sup>わか</sup>壮い女であった。

「こんな遅くまで、父さんは何をしていらっしゃることやら」

小提燈<sup>つ</sup>を点けた女が走って来たが、よほどあわてていると見えて、辻君姿の女にどたりと突きあたった。

「これは、どうも」

小提燈の女は丁寧に頭をさげた。辻君姿の女は其の顔に眼をつけた。

「あ、おまえは妹」

小提燈の女も対<sup>あいて</sup>手に眼をつけていた。

「あなたは姉<sup>あね</sup>さん」

辻君姿の女はお岩で、小提燈の女はお袖であった。お岩は物乞に往っている父親の左門を、お袖は途中で別れた与茂七の後を追うて来たところであった。お袖はお岩のあさましい姿をはっきり見た。

「あなたは、まあ、あさましい、辻君などに」

お岩はお袖の顔をきつと見た。

「おまえこそ、与茂七さんと云うれっきとした所<sup>おっと</sup>天<sup>ごろ</sup>がありながら、聞けば此の比、味な勤めとやらを」

「え、それは」

「これと云うのも貧がさすわざ、父<sup>とと</sup>さんが二人に隠して、観音さまの地内で袖乞をしておられるから、わたしも辻君になってはおるものの、肌身までは汚しておらぬ」

「それはわたしも同じこと、恥かしい勤めはしても、肌身までは汚しませぬ。それにこんなことをしていたばかりに、今晚与茂七さんに逢<sup>いっしょ</sup>うて、同伴<sup>いっしょ</sup>に来る道で、与茂七さんにはぐれたから、それを探しに」

「わたしも父<sup>とと</sup>さんがあまり遅いから、それが気がかりで」

其の時お岩は地べたで何か見つけた。

「おまえの傍に、それ血が」

お袖は提燈をかざした。其の<sup>あかり</sup>燈<sup>あかり</sup>でお岩は左門の死体、お袖は庄三郎の死体を見つけた。

「あ、たいへん、こりや父<sup>とと</sup>さん」

「こりや与茂七さん」

お岩は左門の死体に、お袖は与茂七の死体にすがりついて泣いた。祠の陰から此の容子を見ていた伊右衛門と直助が、わざとらしく跽音を大きくして出て来た。

「女の泣声<sup>なみごゑ</sup>がする、ただ事ではないぞ」伊右衛門はそう云いお岩の傍へ往って、「おまえは、お岩じゃないか」

お岩は顔をあげた。

「あ、おまえは伊右衛門さん」

直助はお袖の傍へ往った。

「此方<sup>こっち</sup>にいるのはお袖さんか」

お袖は泣きじゃくりしていた。

「父<sup>とと</sup>さんと同じ所で、此のように」

お岩とお袖は悲しみのあまり自害しようとした。伊右衛門は芝居がかりであった。

「うろたえもの、今姉妹が自害して、親、所天の<sup>おっと かたき たれ</sup>讐を何人が打つ」

お岩はそこできっとなった。

「それでは、別れた<sup>みょうとなか</sup>夫婦仲でも、讐うちのたよりになったださりますか」

伊右衛門はお岩を<sup>じぶん もの</sup>己の有にできるので心でほくそ笑んだ。

「別れておっても、去り状はやってないから、やっぱり夫婦、<sup>しゅうとどの</sup>舅殿の讐も打たし、妹婿の讐も打たす」

直助はお袖を云いくるめた。

「こうなるからは、是非ともおまえの力になる」

#### 四

<sup>ぞうしがや</sup>雑司ヶ谷の民谷伊右衛門の家では、伊右衛門が内職の提燈を貼りながら按摩の宅悦と話していた。其の話はお岩の<sup>さん</sup>産の手伝に雇入れた<sup>こへい</sup>小平と云う<sup>こもの</sup>小厮が民谷家の家伝のソウセイキと云う<sup>ぬす</sup>薬を窃んで逃げたことであつた。其の時<sup>びょうぶ</sup>屏風の中から手が鳴った。宅悦は腰をあげた。

「はい、はい、お薬でござりますか」

宅悦が屏風の中へ入って往くと、伊右衛門は舌打ちした。

「此のなけなしの中へ、<sup>がき</sup>餓鬼まで産むとは気のきかねえ、これだから素人の女房は困る」

宅悦は屏風の中から出て七輪へ<sup>あお</sup>薬の土瓶をかけて煽ぎだした。伊右衛門はにがにがしい顔をした。

「お岩の薬か、生れ子の薬か」

「これは、お岩さまのでござります」

其の時<sup>あきやまちょうべえ</sup>秋山長兵衛が走るように入つて来た。

「民谷氏、小平めをつかまえましたぞ、<sup>と</sup>窃つて逃げた薬は、これに」

「これは<sup>かたじけ</sup>忝ない」伊右衛門は貼りかけていた提燈を投げ棄てるようにして、長兵衛から小風呂敷の包みももらい「して、小平めは」

其処へ<sup>せきぐちかんぞう</sup>関口官蔵と<sup>ちゅうげん</sup>中間の<sup>はんすけ</sup>伴助が、小平をぐるぐる巻きにして入つて来た。宅悦は小平を口入した責任があつた。

「てめえ故に、な、おれまでが、難儀しておるぞ」

伊右衛門は惨忍なことを考えていた。小平ははらはらしていた。

「どうぞ、おゆるしなされてくださりませ」

「ならん、たわけめ、<sup>そくび</sup>素首を打ち落とす奴だが、<sup>やつ</sup>薬を取りかえたことだし、それに、昨日立<sup>いのち</sup>てかえた金をかえせば、<sup>てめえ</sup>生命だけは助けてやるが、其のかわり<sup>てめえ</sup>汝の指を、一本一本折るからそう思え」

小平は身をふるわせた。

「旦那さま、お慈悲でござります、そればかりは、どうぞ」

長兵衛がついと出た。

「やかましい」と怒鳴りつけて、それから皆みんなに、「さあ、猿轡さるぐつわをはめさっしやい」

官蔵、伴助、宅悦の三人は、長兵衛に促されて手拭で小平に猿轡をはめ、まず鬢びんの毛を脱いた。其の時門口へお梅の乳母のお槓が、中間さかだるに酒樽じゅうづめと重詰じゅうづめを持たして来た。

「お頼み申しましょう」

伊右衛門はそれと見て、三人に云いつけて小平を壁厨おしいれへ投げこませ、そしらぬ顔をしてお槓を迎えた。

「さあ、どうか、これへこれへ。御近所いつにおりながら、何時も御疎遠つかまつります、御主人にはおかわりなく」

「ありがとうございます、主人喜兵衛はじめ、後家弓ごけとも、よろしく申しました。承わりますれば、御内室お岩さまが、お産そまつがありましたとやら、お麓末でござりますが」

お槓はそこで贈物を前へ出した。伊右衛門はうやうやしかった。

「これは、これは、いつもながら御丁寧いれものに、痛みこちらいります、器物は此方よりお返しいたします」

「かしこまりました」それから懐中かいちゅうから小さな黄ちいろな紙きいで包んだ物を出して、「これは、てまえ隠居の家伝でござりまして、血の道の妙薬でござります、どうかお岩さまへ」

伊右衛門はそれを取って戴いた。

「これはお心づけかたじけ 忝かたじけ のう存さゆずる、それでは早速」と云って伴助を見て、「これ、てめえ、白湯をしかける」

其の時屏風あかんぼの中で嬰兒の泣く声あかんぼがした。お槓が耳をたてた。

「おお、ややさま、男の子でござりまするか」

伊右衛門は頷いた。

「さようござる」

「それはお芽出とうござります、それでは」

お槓の一行が帰って往くと、長兵衛と官蔵がもう樽の口を開け、重詰を出して酒のしたくにかかった。伊右衛門はにんまりした。

「はて、せわしない手あいだのう」

伊右衛門は喜兵衛の家から帰って来た。伊右衛門は喜兵衛の家へ礼に往ったところで、たくさん  
の金を眼の前へ積まれて、一家の者から、

「ぜひともむこ聳むこになってくれ」

と云われたので、

「お岩と云う、れっきとした女房があり、それにこども児こどもまであるから」

と云って、ていさいのいいことを云った。するとお梅が帯の間からかみそり剃刀かみそりを出して自害しようとするので、驚いていると、今度は喜兵衛が、

「伊右衛門殿、わしを殺してください」

と云って、お梅の可愛さのあまり、伊右衛門とお岩の仲を割くために血の道の妙薬と云って、  
顔のかたち容かたちの変わる毒薬をお楨に持たせてやったと云った。

伊右衛門はそこでお梅を女房にすることにして帰って来たところであった。伊右衛門は上へ  
あがってお岩の寝ている蚊帳の傍へ往った。あかんぼ嬰兒あかんぼに添乳をしていたお岩は気配を感じた。

「油を買ってきたの」

お岩は伊右衛門の留守に、油を買いに往った宅悦が帰って来たのだと思った。伊右衛門は顔を  
さし出すようにした。

「おれだよ」

お岩は其の声で伊右衛門だと云うことを知った。

「伊右衛門殿」

「うむ、今帰ったが、さっきの薬を飲んだか」

「はい、あ彼のお薬を服むと、其のまま熱が出て顔が痛うて」

「そうか、顔が」

「痺れるようでござりました」

お岩はそう云いながら蚊帳の裾をめぐって出て来た。伊右衛門は其の顔に注意した。お岩の顔  
は紫色には脹れあがっているうえに、左のまぶた瞼まぶたが三日月形につぶ突き潰したように垂れていた。それは  
二目と見られない物凄い顔であった。伊右衛門はさすがに驚いた。

「や、かわった、かわった」

お岩はさっき宅悦がじぶん己じぶんの顔を見て驚いたと同じように、伊右衛門が驚いたので不思議でたま  
らなかった。

「私の顔に、何か変わったことでも」

伊右衛門はあわててそれをさえぎ遮さえぎるようにした。

「な、なに、ちょっとの間に、おまえの顔色がよくなったから、やっぱり彼の薬がきいたと見  
える」

お岩は何かしら不安であった。

「顔色がよくなっても、私はなんだか」と云いかけて、急にしんみりして、「もし私が死んでも  
、此の子のためにのちぞえ当分後妻のちぞえをもたないように頼みます」

お岩は醜くなった眼に涙を浮べた。伊右衛門はかんで吐き出すように云った。

「後妻か、そりゃ持つさ、一人でいられるものか。おまえが死んだら、すぐ持つつもりじゃ」  
「え」

「そんなことは、あたりまえじゃないか」

「まあ、なんと云う薄情な」

「どうせおれは薄情だ、こんな薄情者にいつまでもくっついてないで、佳い男でも持って、親仁いの讐を打ってもらうがいいよ」

伊右衛門は今夜喜兵衛がお梅を伴れて来ることになっているので、それまでに何とかしてお岩を追いだすようにしなくてはならなかった。お岩は齒をくいしばった。

「何と云う情ないことを、こんな可愛い児まであるに」

「何が可愛い、そんなに可愛けりゃ、くれてやるから伴れて往け。きさまのような不義者ふぎものは、一刻いっときもおくことはできん、さっさと出て往ってくれ」

「何と申します、いつ私が不義をいたしました」

「しらばくれてもだめだ、きさまは彼の按摩あと不義をしているのだ」

「あんまりな、そりゃ、あんまりでござります」

お岩は泣きくずれた。伊右衛門はふと思い出したことがあった。

「そうは云っても、我鬼がきまで出来たことじゃ」きろきろと四辺あたりへ眼をやり、落ちていいる櫛を見つけてそれを取り、「良いものがある、これでも持って往こうか」

お岩は其の手にすがりついた。

「あ、それは母かかさんの、形見の櫛、そればかりは、どうぞ」

伊右衛門はじろりと見た。

「いけねえのか」

「そればかりは、どうぞ」

お岩は一所懸命であった。伊右衛門はしかたなく櫛を投げだした。

「それじゃ、何か出せ、急に金のいることができた」

出せと云っても金になるような物は、これまで全部持ち出しているのであった。お岩は暫く考えていたが、思たいだしたようにして起ちあがった。

「それでは、私の」

お岩は帯を解き、襦袢一枚になって、泣く泣く其の衣服を伊右衛門の前へさし出した。伊右衛門はそれをひったくるようにした。

「これだけじゃ、しょうがない。そうじゃ、蚊帳がある」

お岩はあきれた。

「其の蚊帳を持って往かれては、坊やが」

「我鬼なんかどうでもいい、蚊がくうなら、親のやくめじゃ、追ってやれ」

伊右衛門はさっさと蚊帳をはずして、泣きしずむお岩を尻眼にかけて出て往った。

## 六

お岩は苦しい体をひきずるようにして、台所から亀裂ひびの入った火鉢を出して来た。そして、それに蚊遣りをしかけながら宅悦を見た。

「いくらなんでも、あんまりじゃないか、こんなに蚊がいるのに」

宅悦はお岩の鬼魅きみのわるい顔を避けながらもじもじしていた。

「ひどいことをするものだ、男のわしでさえ愛憎あいそがつきた。もし、お岩さん、あんな薄情な男と、何時までいっしょにいねえで、いっそわたしと」

宅悦はお岩の手を執って引き寄せた。お岩は驚いて其の手を揮り払った。

「あれ滅相な、其の方は、まあ武士の女房に」

宅悦はいやしい笑いかたをした。

「いくら、おまえさまばかりが操をたてても、伊右衛門さまの心は、とうから変わっております。今のうちに、わたしの云うことを聞く方が、おまえさまのためでござります」

「いくら所天おっとがどうであろうとも、私は私、けがらわしい。女でこそあれ武士の娘、不義を云いかけるとはもってのほか」

お岩はいきなり小平のさしていた刀を執って脱いた。宅悦はうろたえた。

「あ、あぶない」

宅悦はお岩に飛びかかって、其の刀をもぎ取ろうとした。お岩はそれを取られまいとして争っているうちに、どうしたはずみ機か刀が飛んで欄間の下へ突きささった。お岩はよろよろとなった。

「は、はなして」

お岩は刀の方へ駆け寄ろうとした。宅悦はあわてた。

「ま、まあ、静にしてくだされ、今云ったのは、皆嘘でござります。いくら私がものずき好奇でも、其のお顔では」

「え、私の顔がどうかなって」

「可哀そうに、何も知らずに服のんだ彼の薬あは、血の道の妙薬どころか、まあ、これを見なさるがよい」

宅悦は櫛くしたとうから鏡を出した。お岩は急いで鏡に手をかけて己じぶんの顔を映したが、己の顔とは思われないので後うしろを見た。

「何人ぞ後に」後には何人もいなかった。「こりゃ、わしかいの、ほんまにわしの顔かいの」

お岩は身をふるわせて泣きだした。宅悦は真箇ほんとのことを云わなくてはならなかった。

「いやがるわたしをおどしつけて、みだらなことをさしたのも、今夜喜兵衛の孫娘と内祝言ないしゅうげんをするために、おまえさまを追いださなくては、つごうがわるいからでござりますよ」

お岩はこれを聞くと狂人のようになった。

「もう此のうえは、死ぬより他はない」きつとなって、「息のあるうちに喜兵衛殿に礼を云う、鉄漿かねの道具をそろえておくれ、早う、早う」

宅悦はふるえていた。

「産後のおまえさまが、鉄漿をつけては」

「大事な、早う、早う」

宅悦はお岩が狂人のようになっているので、何とかして止めようとしたが止められなかった。宅悦はしかたなく鉄漿の道具を持って来た。お岩は体をふるわしながら鉄漿を付け、それから髪

す  
を櫛くしきにかかったが、櫛くしを入れるたびに毛が脱けて、其の後から血がたらたらと流れた。

ぬげげ したた なまち とお  
「やや、脱毛ぬげげから滴したたる生血なまちは」よろよると起きあがって、「一念とお貫とおさでおくべきか」

あかんぼ  
宅悦は泣きだした嬰兒あかんぼを抱いていた。

「これ、お岩さま、もし、もし」

宅悦はお岩の傍へよって片手を其の肩へかけた。お岩の体はよろよるとなって倒れかかった。

其処には鴨居に刺さっていた刀が落ちかかっていたので、お岩の咽喉のどは其の刀へ往った。

「う、う」

どす黒い血がお岩の顔から体を染めた。宅悦はふるえあがった。

「た、たい、へんだ、たいへんだ」

どこ  
其の時何処どこからともなく一匹の猫が来た。

「こん畜生、死人に猫は禁物だ」

くわ  
宅悦は猫を追った。其の途端に欄間の上から大きな鼠が猫を咬くわえて出て来たが、すぐ畳の上へ落とした。宅悦は嬰兒を寝かすなり表へ走り出た。門の外には伊右衛門がかみしも袴かみしもをつけて立っていた。

「按摩か、首尾はよいか」

宅悦は夢中になっていた。

「たいへん、たいへん、たいへん、お岩さまがたいへんだ。それに、大きな鼠が、猫が」

宅悦は狂人のようになって走った。伊右衛門は訳が判らなかった。

「なんだ、鼠がどうしたのだ。鼠、鼠と云って逃げやがったが、首尾がわるいのか。それでは、  
あ め まおとこ  
彼あの中間奴めをまおとこ姦夫まおとこにするか」それから内へ入って、「お岩、お岩」

足もとで嬰兒が泣きだした。伊右衛門はびっくりした。

「あ、もうすこしで、踏み殺すところじゃ。お岩は何処へ往った、おい、お岩」

あ  
其の時また彼の大きな鼠が何処からともなく走って来て、泣き叫ぶ嬰兒に咬みついた。

伊右衛門はすばやく嬰兒を抱きあげて、きょろきょろと四辺あたりを見た。其処にお岩の死骸があった。伊右衛門は駈けよった。

あかいわし きやつ  
「や、こりやお岩が死んでおる」刀を見つけて、「こりやお岩の赤鯛あかいわしじゃ、そんなら彼奴きやつが殺したか」

伊右衛門は一方の襖をあけた。其処には小平が屋のままの姿で押しこめられていた。伊右衛門はいきなり小平を引きずり出して、いましめ縛とを解き猿轡とを除った。

きさま  
「やい、小平、よくもよくもきさま汝きさまは、お岩を殺したな」

ゆ  
「めっそうな、たった今まで、両手も口も結ゆわえられておりましたに」

「それでも、それぞれ、両手が動くじゃないか。さあ、云え、なんでお岩を殺した」

げしゅにん  
「そう云わっしゃるなら、わたしがお岩さまを殺した下手人になりますから、どうか彼のソウセイキを」

あ  
「べらぼうめ、彼の唐薬は、さっき質屋へ渡したのだ」

「それでは、あれは、彼の質屋に」

小平が走って往こうとする<sup>うしろ</sup>後から、伊右衛門は刀を脱いで斬りつけた。

「お岩の<sup>かたき</sup>仇」

其処へ秋山長兵衛と関口官蔵が入って来た。長兵衛は眼をみはった。「民谷氏、<sup>うじ</sup>ぜんたいこれは」

伊右衛門は小平をずたずたに斬りきざんでいた。

「不義者を成敗したのだ」

伊右衛門はそれから長兵衛と官蔵に頼んで、お岩と小平の死骸を<sup>かんだがわ</sup>神田川へ投げこました。

## 七

伊右衛門は屏風を開けてお梅の傍へ往こうとした。伊右衛門は其の夜遅くなって喜兵衛がお梅を<sup>さかずき</sup>伴れて来たので、祝言の盃をしたところであった。

「どうじゃ、お梅」

伊右衛門はお梅の枕元へ座って、恥かしそうに<sup>うつむ</sup>俯向きになっているお梅の顔を覗きこんだ。と、お梅が、

「伊右衛門さま、どうぞ末なごう」

と云って顔をあげたが、それはお梅でなく物凄いお岩の顔であった。

「あ」

伊右衛門は傍にあった刀を脱いで斬りつけた。首は刀に従って前へころりと落ちたが、落ちた首はお梅であった。

「やっぱりお梅であったか」

伊右衛門はうろたえて隣の<sup>へや</sup>室へ飛びこんだ。其処には喜兵衛が<sup>あかんぼ</sup>嬰兒を抱いて寝ていた。

「喜兵衛殿、たいへんじゃ」

伊右衛門は喜兵衛を起した。それは喜兵衛でなくて嬰兒を咬い殺して口を血だらけにしている小平であった。小平は伊右衛門を見た。

「旦那さま、薬をください」

伊右衛門は飛びあがった。

「わりゃ小平め、よくも子供を殺したな」

伊右衛門の刀はまた其の首に往った。同時に首はころりと落ちたが、それはやっぱり喜兵衛の首であった。

「さては、死霊のするしわざか」

其のまわりには青い火がとろとろと燃えていた。

伊右衛門は<sup>ふ</sup>刀を揮り揮り門口へ往ったが、門口の戸がひとりでにがたりと締って出られなかった。

## 八

<sup>おんぼうぼり</sup>隠亡堀の流れの向うに陽が落ちて、<sup>いりあい</sup>入相の鐘がわびしように響いて来た。<sup>ふかあみがさ</sup>深編笠に顔をか

くした伊右衛門は肩にしていた二三本の竿をおろして釣りにかかった。

傍にはうなぎかき鰻搔べっこうになっっている直助がいて、煙草を飲みながら今のさき鰻搔にかかって来たべっこう鼈甲の櫛を藁で磨いていた。伊右衛門はそれを見て、煙草を出して火を借りようとした。

「火を借してもらいましょう」

直助はすましてきせる煙管の火を出した。

「お点けなされませ」そして笠の中を覗いて、「伊右衛門さんお久しゅうござります」

伊右衛門は驚いた。

「そう云うてめえは、直助か」

「其の直助も、今では鰻搔の権兵衛」

話のうちにうき標がびくびく動きだした。伊右衛門はそれと見て竿をあげるとこぶな小鮒がかかっていた

「ああ、鮒か」

其のうちに他の標が動きだした。

「そりゃ、またかかった」

伊右衛門は調子にのって大きな声をしながらあげた。それにはなまず鯰がかかっている草の上へ落ちた。伊右衛門はあわてて傍にあったそとうば卒塔婆を抜いて押え、びく魚籃に入れるなり卒塔婆を投げだした。卒塔婆は近くに倒れて気を失っていた女乞食の前へ落ちた。それはお梅の母親のお弓であった。お弓は伊右衛門に復讐するために、伊右衛門の所在をさがしているところであった。お弓は卒塔婆を取りあげた。其の卒塔婆には俗名民谷伊右衛門と書いてあった。それは伊右衛門の母親が殺人の大罪を犯した我が子のために、世間をごまかすために建てたものであった。

「や、かいみょう戒名ととの下に記した此の名は、父さんと娘を殺した悪人の名、それではもう此の世にいないのか」

伊右衛門はそれを知った直助にあいずをした。そこで直助はお弓のあいてになった。

「生きてる者に、なんで卒塔婆をたてる、伊右衛門が死んでから、今日でたしか四十九日」

お弓は無念でたまらないようにした。伊右衛門はそろそろと起って往って、いきなり足をあげてお弓を蹴った。お弓はひとたまりもなく川へ落ちて水音をたてた。直助が感心した。

「なるほど、おまえは、悪党だ」

伊右衛門はにやりと笑った。

「これもおぬしに習ったからよ」

此の時長兵衛がほおかむり頬冠たしてきょろきょろとして来たが、伊右衛門を見つけた。

「民谷氏、此処にござったか」

名を云ってはいけなかった。

「これさ、これさ」

「なるほど、これは。だがこなたの巻きぞえをくってはならぬから、遠国に往くつもりでござる、どうか路銀を」

「やろうにもくめんがつかぬ」

「くめんがつかねば、訴え出ようか」

「さあ、それは」

伊右衛門はしかたなしに母親からもらっている墨付を長兵衛にやって歸し、それから竿をあげて歸りかけた。と、前の流れへ杉戸が流れて来たが、それが不思議に立ちあがったので、かけてあった菰こもが落ちた。其処には水で腐ったお岩の骨ばかりの死骸があった。伊右衛門は恐ろしいので杉戸を前へついた。杉戸は其のひょうしにぱったりと裏がえしになった。裏には首へ藻のかかった小平の死骸があった。

お袖は山刀を持ってせっせとしきみ 櫛の根をまわしていた。其処はふかがわほうじょういん 深川法乗院 門前で俗に三角屋敷と云う処であった。お袖は直助という線香を売っているところであった。

淡い冬の夕陽のふるえている店頭には、物干竿にかけた一枚の衣服が風にひるがえり、其の傍の井戸端にはたらい 盥かねこや があって、それにはどろどろになった女物の衣服が浸けてあったが、それは金子屋と云う質屋の手代のしょうしち 庄七あね が、質の流れだと云って洗濯物を頼んで来ているものであった。お袖は気になることがあるのか櫛の根をまわすことをやめて、盥の傍へ行き、

「此の衣服にはどうも見覚えがある、これはたしかに姉さんの」

其の衣服はお岩の着ていたものであるが、お袖はお岩が死んだことを知らないのです、そうと断定することができなかつた。直助がそこへ帰って来た。

「これ、日が暮れかかったのに、ほしもの 干物か を入れねえか」

直助が家へ入るのでお袖は追って入った。

「米屋さんが米を持って来たから、のち 後までとかる 軽う云っておいたよ」

「そうか」そして考えついてかます 吠たばこいれ のか 糞入から彼の櫛を出して、「此の櫛なら、いくらか貸すだろう」

お袖はそれを見て驚いた。

「おや、その櫛は、そりゃ何処で拾ったのです」

「二三日前に、ざるこぼし 猿子橋の下であね 鰻搔にかかったが、てめえ、何か見覚えでもあるのか」

「ある段か、これは姉さんが、あね 母さんの形見だと云って、大事にしていた櫛。それに庄七さんにあ 頼まれた彼の衣服と云い、どうしたことだろう」

「おい、これ、馬鹿な事を云うな、世間にはいくら 幾何でも同じ物があらあな」

直助はそれから質屋へ往こうとした。お袖は其の手にすぎた。

「衣服は違ってても、櫛はたしかに姉さんの櫛、どうぞ、そればかりは」

「てめえもばかりちぎ 馬鹿律気な。だいち死んだていしゆ 所天へ義理をたてて」

お袖は直助にせまられても与茂七のかたき 讐したく が見つかるまではと云って夫婦にならずにいるところであった。お袖はやがて夕飯の準備に庖厨へ往った。直助は其の間に質屋へ往くべく門口へ出た。と、其の時傍の盥に浸けてある衣服の中から、瘦せ細った手がぬっと出て直助の足をつかんだ。直助はふる 顫えあがって手にした櫛を落とした。と、盥の手が引込んだ。

「今のは、たしかに女の手だ」

直助が考えこんでいるところへ、お袖が膳を持って出て来たが、直助が落としてある櫛を見つけた。

「姉さんが、大事がらしやんす櫛じゃと云うに、こんなにして」

お袖は櫛を拾いあげたが、やっぱり米屋のことも気になるのであった。

「えよう 栄耀につかうではなし、姉さん借してくださいよ」

と云って直助を質屋へやろうとした。そこで直助は、  
「そうか、それじゃ往って来ようか」

と云ってお袖から櫛を取ろうとした。と、また盥の中から瘦せた手が出て直助の櫛を持った手をつかんだ。

「あ」

直助は驚いてまた櫛を投げだした。が、それはお袖には見えなかった。

「おまえさん、何をそんなに。櫛を何処へやったのですよ」

「盥の中にあらあな、おまえが持ってくがいいや」

お袖は盥の中を覗きこんだが、櫛らしいものは見えなかった。お袖はちょっと其の辺へ眼をやった後で、そっと彼の衣服をつかんで振って見た。盥の水は真赤な生なましい血に変わっていた。お袖はびっくりした。と、其の中から一匹の鼠が、彼の櫛をくわえたまま飛びだした。直助はすぐそれを見つけた。

「鼠が、鼠が」

鼠は仏壇へ往って<sup>くわ</sup>啣えていた櫛を置くなり消えてしまった。

—○

お袖は按摩の宅悦からお岩が伊右衛門のために殺されて神田川に投げこまれたと云うことを聞いて驚いた。それも姉が小平と不義をしたと云って、小平とともに杉戸へ打ちつけられたと聞いては、泣くにも涙が出なかった。直助はお袖を慰めた。

「憎い奴は伊右衛門じゃ、まあ気を落とさずに時節を待つがいい、きっと俺が<sup>かたき</sup>讐を打ってやる」

お袖は手酌で一ぱい飲んでそれを直助にさした。

「さ、一つ飲んでくださんせ」

直助は盃を執ってお袖に酌をしてもらった。

「これは、御馳走。それにしても女の身では、酒でも飲まずにはいられまい、他人のおれでさえ」

「其の他人にせまいために、女のわたしからさした盃」

「そうか」

「もし、もう祝言はすんだぞえ、親と夫の百ヶ日、今日がすぎれば、今宵から」

「そんならおぬしは」

「操を破って操をたてるわたしが心」

二人は立ててある屏風の中へ入ったところで、表の戸をとんとんと叩く者があった。直助が頭をあげた。

<sup>たれ</sup>「何人だ」

声に応じて外から男の声がした。

「すまねえが、線香を一把<sup>わ</sup>もらいたい」

直助は<sup>いま</sup>忌いましかつた。直助は吐き出すように云った。

「気のどくだが、品ぎれだよ」

「それなら、此処にある 櫛<sup>しきみ</sup> でけっこうだ」

「だめじゃ、そりゃ一本が百より安くはならねえ、他へ往って買わっしゃるがいい」  
外の男はちょっと黙ったが、すぐあわてて声をたてた。

「あれ、あれ、<sup>ぬすっと</sup> 盗人が洗濯物を持って行くわ」

直助は飛び起きて雨戸を開けた。其処に一人の男が立っていた。

「これはどうも、つい置き忘れておりました」

直助は洗濯物を執って入ろうとして相手に気が注くなり、のけぞるようにして驚いた。

「<sup>ゆうれい</sup> 鬼 だ、鬼だ」

直助は家の内へ飛びこんで、ぴしゃりと雨戸を締めて押えた。お袖も驚いて出て来た。

「何処に、何処に <sup>ゆうれい</sup> 鬼 が」

其の時外の男の声がした。

「わたしは <sup>ゆうれい</sup> 鬼 じゃない、此処を開けてください。お眼にかかれば判ります」

お袖が其の声を聞きつけた。

「どうやら、聞きおぼえのある声じゃ」

直助が手を揮った。

「いけねえ、それが <sup>ゆうれい</sup> 鬼 じゃ」

「それでも」

お袖は首をかしげながら起きて往って雨戸を開けた。外の男は与茂七であった。

「おや、おまえは、与茂七さん」

「お袖か、わしは、おぬしの所在を探しておったが、かわった処で、はて <sup>めんよう</sup> 面妖 な」

「わたしよりおまえさんは、いつぞやの晩、観音裏の田圃道で人手にかかって」

「あれか、あれなら奥田庄三郎だ。彼の晩、おめえと別れて、庄三郎に逢い、すっかり衣裳をとりかえた」直助の方を見て、「あなたは、浅草で見知りごしの薬売、たしかに其の名も直助殿」

「あ」

直助の驚く一方で、与茂七はお袖を見た。

「して此の人は、なんで今時分来てござる」

お袖はちょっと困ったが、宅悦の置いて往った杖に気が注いた。

「お、お、それ、按摩じゃわいな」

お袖は死んだと思っていた与茂七が不意に現れたので、身の置きどころに困っていた。お袖は与茂七の <sup>かたき</sup> 鬻 を打ってもらうために、直助に肌をゆるしたのであったが、今となっては其のためにかえってあがきがつかなかった。お袖はいよいよ腹をきめた。お袖は直助に <sup>ささや</sup> 囁 いた。

「一旦、おまえに大事を頼み、女房となったうえからは、やっぱり女房、与茂七殿に酒を飲まして、わたしが手引する」

そこで直助は外へ出て <sup>やぶ</sup> 藪の中へ身をひそめた。そこでお袖は与茂七に囁いた。

「寝酒をすすめて寝かしたうえで、<sup>あんどん ひ</sup> 行燈 の燈を消しますから」

それで与茂七も外へ出た。お袖はそこで時刻をはかって行燈の燈を消した。それと見て直助は

出刃を、与茂七は刀を脱いで家の内に入って、屏風の中を目あてに刺しとおした。同時に女の悲鳴が聞こえた。二人は目的を達したと思って屏風をはねのけた。屏風の中にはお袖が血みどろになっていた。其のとたんに月が射した。二人は呆れて眼を見あわした。

「これはどうした」

「これは」

お袖はやっと顔をあげた。

「与茂七さん、どうか、ゆるしておくれ。それから、直助さんは、養父と姉の讐を討った後で、どうか、小さい時に別れた兄あにさんを尋ねて、此のわけを話してください」

お袖には幼い時に別れた一人の兄があった。お袖は苦しそうに懐から一通の書置と、臍ほぞの緒おの書きつけを出して直助に渡した。直助は其の臍の緒の書きつけをじっと見た。それには、『もとみやさんもとみやさんだゆうだゆう そで』元宮三太夫 娘袖』としてあった。直助は見て仰天した。直助は傍にあった与茂七の刀を取ったかと思うと、いきなりお袖の首を打ちおとした。与茂七は驚いた。

「何故なぜに、そんなことを」

直助はどしりと其処へ坐るなり、其の刀を己じぶんの腹に突きたてた。

「与茂七殿、聞いてください」

お袖が探していた幼い時別れた兄は、直助であった。直助は臍の緒の書きつけによって、先刻祝言の盃を交したお袖が妹であったことを知り、其のうえ、観音裏で与茂七と違って殺したのは、もと己じぶんの仕えていた主人の息子であった。直助は己のあさましい心こころを悔いながら死んでいった。

――

伊右衛門は秋山長兵衛を伴につれて鷹狩に往っていた。二人は彼方此方と小鳥を追っているうちに、鷹がそれたので、それを追って往った。

空には月が出て路みちぶちには螢が飛んでいた。其処に唐茄子とうなすを軒はに這わした家があって、栗丸太しおりもんの枝折門たなばたの口には七夕の短冊竹をたててあった。

長兵衛がそれと見て中を覗きに往った。中には縁側付の亭座敷ちんがあって、夏なりの振袖きを著たきれい姉な娘が傍においた明るい行燈の燈で糸車を廻していた。長兵衛は伊右衛門にそれを知らせた。

「美しい女が糸車を廻しております」

「なに美しい女」

「さようござります」

「それでは其の方が案内して、鷹のことを問うてみぬか」

そこで長兵衛が中へ入って往った。

「鷹がそれて行方が判らなくなったが、もしか此方こちらへ」

鷹は行燈の上にとまっていた。娘は莞にっとして鷹を見た。

「此処こちらにあります」

長兵衛は驚いた。

「いや、こいつは <sup>みょうみょう</sup> 妙々」

伊右衛門は長兵衛の知せによって中へ入り、やがて腰の <sup>ひょうたん</sup> 瓢箪の酒を出して飲みだした。伊右衛門は娘に <sup>ひ</sup> 惹きつけられた。

「そなたの名は」

其の時一枚の短冊が風に吹かれてひらひらと飛んで来た。娘はそれを執<sup>と</sup>って、  
「わたしの名はこれでござります」

と云ってさしだした。それには、「瀬をはやみ岩にせかるる瀧川の」と百人一首の歌が書<sup>く</sup>いてあった。伊右衛門は頸<sup>くび</sup>をかたむけた。

「これが其方の名とは」

「岩にせかるる其の岩が、私の名でござります」

伊右衛門はやがて娘を自由にして帰ろうとした。と、娘がその袖を控えたがその娘の顔はお岩の顔であった。

「あ」

伊右衛門は飛びあがった。同時に伊右衛門の手にしていた鷹が大きな鼠になって伊右衛門に飛びかかって来た。

「さてこそ執念」

伊右衛門は刀を抜いた。そして、無茶苦茶になって其の <sup>あたり</sup> 辺を斬りはらっているうちに、彼の糸車が青い火の玉になってぐるぐると廻りだした。

## 一二

「これこれ、またおこりましたか。 <sup>みんな</sup> 皆がいますぞ、いますぞ」

伊右衛門ははっと思って眼をあけた。伊右衛門はお岩の亡霊に悩まされるので、 <sup>へびやま</sup> 蛇山の <sup>あんしつ</sup> 庵室に籠<sup>こ</sup>って、 <sup>じょうねん</sup> 浄念と云う坊主に <sup>きとう</sup> 祈祷してもらっているところであった。

外には雪が降っていた。伊右衛門は行燈に燈を入れ、それから門口の流れ <sup>かんじょう</sup> 灌頂の傍へ往って手桶の水をかけた。

「産後に死んだ女房子の、せめて未来を」

するとかけた水が心火<sup>しんか</sup>になって燃え、其の中からお岩の <sup>あかんぼ</sup> 嬰児を抱いた姿があらわれた。

伊右衛門は驚いて庵室の内に入った。中にはさっき狂乱して引きちぎった <sup>しちょう</sup> 紙帳がばらばらになっていた。お岩の亡霊も <sup>つ</sup> 跟いて入って来た。伊右衛門はふるえあがった。

「お岩、もういいかげんに <sup>じょうぶつ</sup> 成仏してくれ」

と、お岩がゆらゆらと寄って来て、抱いていた嬰児を伊右衛門の前へさし出した。

「死んだと思ったら、それでは其方が育てていたのか」

伊右衛門はうれしそうにその嬰児をお岩の手から執った。同時にたくさんの鼠が出た。伊右衛門は驚いたひょうしに抱いていた嬰児を執り落した。嬰児は畳の上にならずしりと云う音をたてた。

それは石地藏であった。其の時傍にいた母のお熊くまがきゃっと云ってのけぞった。お熊の咽喉ぶえにお岩が口をやっているところであった。

「おのれ」

伊右衛門は刀を抜いて其のあたり辺を狂い廻ったが、気が注ついた時には、己じぶんを捕えに来ている大勢の捕手を一人残らず斬り伏せていた。伊右衛門は其のまま其処そこを走り出た。と、其の眼の前へ、  
「伊右衛門待て」

と云って駆け出して来た者があった。それは与茂七であった。

「其の方は与茂七か」

伊右衛門はきつとなって身がまえした。与茂七は刀を脱いた。

「お袖のためには義理の姉、お岩かたきの讐かたきじゃ、覚悟せよ」

「なにを」

伊右衛門は与茂七を斬り伏せようとした。と、何処からともなく又数多たくさんの鼠が出て、伊右衛門の揮ふるっている刀にからみついた。其のひょうしに伊右衛門は刀を執とり落した。其処を与茂七が、  
「おのれ」

と云って肩から斜はすに斬りおろした。伊右衛門の体は朱あけに染まって雪の上へ倒れた。



怪談集

平成二十三年二月十日 初版

著者

田中貢太郎

発行所

藍岩堂

